

や主水事一方ならぬ先公の御目かけられ、御逝去の砌には追腹も切るべき筈の一身を、今日までも存生いたせし本願、あはれ何のためと思召す、さるを餘命いく程もなき老の今となり、かく二代の君に見放されまゐらせ、いづこの里に落行くべき、たがために生命を保つべき、あれ見よ典厩の代には人がましき堀も其子の代に勘當うけて徘徊ふぞと、世上の口の端にかければ指先に笑はれむよりは、せめての成果、此場に御免を蒙りて皺腹搔切り申さむ、まことに御席を汚すの恐れあれど、始めて先公が當城を御引受あそばさるゝ節、人しれぬ夜の燈火に此主水を召して宣ふやう、いかに堀よ、我と汝と二人いづれが先だち後るとも、死する時は必らず此城中に息の根を残して子孫の守護とならむ、ゆめ城外に屍を晒すな晒し申さぬと、誓言神文あはれ今も忘れぬ主水が血に、この席を汚すは理の當然、されど其事を知らしめさぬ二代の君前には、偏に御ゆるしを乞ふのみあはせて御憎しみのかよりし主水が

腹の切様は時に取ての御なくさみともならむ』いふや否や體を構へて待間もあらぬ用意の體に、さすがの明成も堪らず聲をかけて障子細目に引開ぬ『老爺待て、待て〜老爺』

切るといはど切るべき主水、御席を汚すの恐れあれど此場に老の皺腹搔切つて、さぞや待兼玉はむ先公に追付まゐらせむと、何事も思ひきつたる用意の體に、さすがの明成も堪らず障子細目に引開けて半面を現はせば、うらみの中にも御懐かしやとばかり、主水うれしげに見上ぐる兩眼の涙を拂ふて、おもはず膝を進めつゝ闕際に這寄りぬ『下世話にも申す如く親子は一世夫婦は二世、あはれ三世と契る主従の死別に、せめて能く見ておけとの御顔にや、但し冥途の先公に御傳言ばし御座るにや、あるは又老臣ふびんと思召して御憤怒を治め玉ふにや』
 『えと急くな、平生の其方でもない見苦しの急き様、急くなく〜』大事の持口破れて味方の足並どつと崩れ、さす敵の百雷頭上に落掛る時だに、小唄うたふて一さし舞ひし堀主水が、

かく、斯く太平の御代に生残つて二代の君前に見苦しく急入る體、あはれの者と思召さすや、
 急くなと仰せられても急かて叶はぬ御家の危急、會津一圓の綻び口、さすがの老臣とよ取亂
 して御座る。きくや否や明成なんとか思ひけむ、またもや隔ての障子さつと閉切りて、以前
 にまさる憤怒の聲のみ漏れぬ『だまれ主水、其方が取亂すほどの危急いづこにある、會津の
 破綻とは諸も不吉の過言、まづ其事を申せ其證據を見む、すねたる強情を老の爲業と思ひ、
 かつは多年の勤務を汲取つて、予が詰問すべき事も差控ゆるに、おのれから進んで詰問めい
 たる言葉の端々、さては物宣はぬ先人の墓を背負ふて當代の我を押ゆる心か、第一、主に對
 ふて誇りがほなる其方の白髪が氣に入らぬぞ、動ともすれば己が一徹を振舞ふて主に迫るが
 如き不敵の眼色、いづれ死際近き生命を的に座を驚かさむとする横道の我意、それを怖れて
 許す我と思ふか白痴奴、今までは先人に對して遠慮もすれ、今日よりは何事も予が一存ちや、

やをれ主水、あらためて其方に問ふべき仔細いちちく答へよ』

主水はらくくと泣て顔を振上げ、閉切りし障子の面ちつと見詰めぬ『元來おろかの一徹に物
 の容赦も辨へず浮世の會釋も存せぬ武骨漢、たゞ日夜ゆめうつにも君の御身を思ふのあま
 り、却て御意に觸れしことも多からむ、さるを一筋に横道我意の不忠と思召され、六十二の
 今日かよる御吐りを蒙むること、偏に主水が運の末、今は何事かを申上ぐべき、謹で御詰問
 を承はり、もしや御心に叶はずば御成敗にあづからむのみ、さても此後は誓つて先公の御名
 を口にいたすまじく、老臣また神かけて人がましき振舞を仕るまじ、かつは斯くまで御憎味
 のかよりし主水が御庭前にも引かれず、なほ障子一重を隔て親しき御言葉賜ふの冥加お
 もへば勿體なや、しみく有難き御事と存じまする』あはれや聲は震ふて涙に曇る老の否運
 を、あるじの明成さらに動せぬ無慈悲の體『よい覺悟ぢや、これほどの謹慎なうて何とする、

さらば予が不審の段々いちく詰問するぞよ『はッ』

心ろの分別は、いづこの里にも天晴れ老功と唄はれ、身の大剛は他國他藩にも鬼の主水と唄はれ、さては六十二年の今日までも物の不覺をとりし過誤なく、出でとは加藤の礎、入つては會津の梁、陪臣ながら黒たよきの槍を立てよ江戸の將軍家にまで許されし身もあはれ、爲まじきものは老ての後の奉公沙汰、一朝こよに君の寵遇衰へては可惜ら苦忠も忽ち不義非道の徒輩となり、理も非に掻消され道理を無理に落されて、また浮ぶ瀬もなき破滅の運に、今は流石の堀主水も説くべき舌なく、唯兩眼に残るは涙のみ、これを最後の君前とはいへど障子の面に對ふて心の暇乞、しほくとして下り來る武者室の詰所には、縛められたるまよの田村兵助、目に迎へて氣遣はしけに問ふ顔を、主水ちつと見下して聲しのばせつよ『兵助』

もはや萬事休したは、其方が折角の縛めも物の用にはならぬ、いざ來よ、破れて後の糸目釘いひつよ縛めを解て城外を指さしぬ、

さすがの老職も君前の首尾あしきに極つたり、やがては御勘當なるべしと聞くや否や、きのふまでも今日までも先達老功と仰ぎし諸士の面々、はや冷たき心の目元に送りいだして、うれしやこよに一萬五千石の浮米といふ顔色を、主水しづかに振返りて慇懃に會釋しつよ『かくの落目となつて罷りゆく老臣奴を、叩き出さむともせられず、さても名残り惜氣に送らるる諸士の芳志、満足に存じ申す、いづれも前途の長き御年輩、此後の御奉公大切に念じまるらす、あよ主水が善い手本で御座る、とかく君に逆はぬが臣たるの道かや、御覽なれ、これが白痴たる老の成果』ぐいと睨みし眼光の物凄き怖ろしさに、おくり出せし諸士の膈ちどみあがりぬ、

故典蔵もろとも生命にかけて受けし名城の見終、二代の主に捨てられて老の白髪の泣終、今こゝに踏む土も廳て冥途の語草とやならむ、さても是非なしと残る心の城門を立出で、大手先の松原にさしかよるころ、俄かに足をとどめて雲を凌げる天主閣を見上げつと「やれ田村よ、君その臣を疑はざれば餘桃を含で喜べども、かなしや寵食へて讒者の舌に逢はど、その餘桃却て身を亡すの基となる、これを思へば百年の苦樂を他人に倚るもの女ばかりか」いひつと涙ほろ／＼と落せば田村兵助また男泣に聲をあけぬ、

其九

生涯の功勞も一朝に潰て横道我意の不忠となり、内外に響き渡りし名聞こゝに消えて背門の霜に笑はれ、六十二年の今を破滅の涙、先公の形見に残りし甲斐もなく二代の主に捨てられつと、あはれ老の行末をいづこの里に朽果てなむ、唯しほ／＼として影も薄氣に城門を出で

し堀主水、やう／＼田村が宿に歸りて奥の一室に閉籠りし程もなく、其あとを追ふて城内より來りし三人の使者、おもむろに君命を傳へていふ「今日の御沙汰として我等が承はりし主意は、主水こそ仔細あつて一萬五千石の知行を召放さる、但し先公の御目かけられし昔に免じて一千石の隠居料を賜はる間、以後は何事も世を忘れて老を養ふべく、もしこれを不承知とあらば何處へなりとも勝手次第に立退くべし、就ては會てより御あづかりの御采配は直ちに返上いたさるべし」きくや否や主水はツと頭を垂れて身を謹みつと「これは／＼、かくまで御憎味のかよりし老耄、縛首にも逢はむと存せしに、以ての外の冥加にあまる御意、老臣つつしんで御承仕つる、なれども、世を忘れて老を養ふものに千石は勿體なし、千石とは太平の世に天晴の武士十人を御召抱に相成るべき料、ひらに御辭退申上げむ、また斯なりし身に御家の御采配を何とせむ、固より不用の品ながら、この采配は先公の御手づから預りまら

せて、いかならむ事ありとも汝が息の根の引取るまでは他人に渡すなと仰せられしもの、その御墨附さへあるほどの品を、たとひ君命なりとて直ちに御返し申さむこと聊か難儀の次第に御座れば、幸ひ近日に御城下を立退く砌、御暇乞として先公の御墓に詣でまつり、此度の仔細を言上仕りて御墓前に返しまるらすべし、其節あらためて御墓前より御受取あそばさるゝが理の當然と、御前の執達よろしく願ひあぐる』いひつゝ俄に手を打鳴して家主の兵助を呼び、わざくの御使者に御酒一献まるらせよと命ずれば、三人の使者さらに顔色を失ふて空涙を滾しつゝ、嗚呼なんとして其儀に及ぶべき、さても斯る君命は我等一期の苦しさよと呟きながら、はふくの體に座を立つて遁歸りぬ、

其夜の人定まり更闌けて後、堀主水は田村兵助と例の尻斬武士佐藤源内の二人を招き寄せ、何事か白紙に認めて示せば、兩人もろともに涙を浮べて聲を忍ばせつゝ『御いたはしや、さ

ては、なほそれ程の御心』いふにや及ぶ、主水は典厩公に捧けし一身、誰がために今日までも生残らむ、君は君たらずとも臣はいづこまでも臣たるの道、唯その道の本道ならぬが心外ぢや、同じ歩まむ足に何として荆棘葛蘿の間道を好むべき、偏に先公尊靈の御守護を祈るのみ、されば夜のあけぬうち兵助は白河口の瀧坂まで駒の一かい入れて、しのばせし我同勢を引連れ來よ、また源内どのは御苦勞ながら今たのみし一條、たゞし首尾よくまるらうや』源内閉ぢたる兩眼くわツと見開いて露もなき頬の笑を浮べつゝ『御懸念御無用、心の働きは小兒に劣る愚鈍なれども、身の働には金城鐵壁のうちに忍び入るも易き業、さらば今宵これより御城内の御枕頭まで』必ず驚かしまるらさぬやう』心得て御座る、面魂は斯く荒れたれど伊賀者の胸は佛の宿』いひつゝ莞爾と笑ふたる顔面いと物凄し、

櫓に響く初夜の太鼓もろとも城内の役所くくに撃つ拍子木の音かすかに聞えて、妻戸を誘ふ木葉の風も沈み、遠侍の鐵行燈も朧ろけに餘光を漏しつゝ、更渡る春の夜に人定めれば四方たゞ閑として、さらぬも物しづかなる屋形の奥ふかく、こゝを寢所と引廻したる鞘室のうち、名香の匂ひ四邊に薫じて錦の夜具に包まれながら、あるじの明成なほいまだ夢も結ばず、うとくとして寐られぬまゝの枕を代ゆる折しも、音なきに隔ての襖さつと開いて屏風の影に物ある心地、さても不思議や、何ぞと頭をあけて見透せば、燈火睡る丸絹燈の下に一人の大男肅然として坐しぬ、

さすがの明成はつと驚きながらも、元來不敵の剛氣のみは父の典厩に劣らぬ本性、顔色も變へず人をも呼ばず、しづかに枕刀を取て膝立直しつゝ、するどき眼光じろくくと頭上より睨みおろしぬ「じたい何者ぞ」

燈火の下に肅然たりし大男、やをら頭をあけて更に動ぜぬ面體、唯うやくしげに音太き聲を潜めつゝ「恐れながら、これは伊賀流忍術の佐藤源内とて昨年秋ごろ御城下を騒がせし曲物、今また斯く深夜に御寢所を犯しまるる罪、萬死にあたる狼藉者とも思召されむが、前後ともに深き仔細あつての業、神もつて心に曲事を存せぬ奴」きくや否や明成がばと夜具を跳退けつゝ、手に取りし枕刀を引付けて息を吞ながら、なほも宿直の武士を呼立てぬ體に、源内おもはず笑を浮べて頭を垂れぬ「この鐵壁中に忽然と現はれし曲物を、眼前に御覽遊ばされて更に御聲もなきは、まことや傳へ承はる典厩公の御長子」たわけたる奴かな、おのれほどの曲者を怖れて人を呼ばうや、其まよに面を上げい「はッ」下司奴、今宵なんとして来た、何がために来た「別段の儀は御座なく、たゞ去年狼藉の御わび」唯それのみか「あいや、その次に申上げたきは、拙者元來江戸の穩密ながら、今は全く堀が苦節の涙に濡

れて心を翻へせし仔細待てく、その仔細をきく前に、其方が江戸穩密といふ慥かの證據を見せし、その證據を見ぬうちは、堀の苦節とやらも立たぬ道理ぢや、これは天晴の御明鑑、さりながら、一命を賭けて天下の諸家諸門へ忍び込み、かく御枕頭をも犯しまるらすほどの危ふき身に、もしや取られて證據となるべき品の御座らう筈なし、されど、御當家に對してのみは幸ひの證據を御覽に入れませうや、その證據とは、それも拙者の身に御座なく、却つ當御城内の御膝下に『なんと申す』拙者を不俱戴天の仇と唱へ、堀主水を怨みの片割と唱へて、近ごろ御召抱同様の身となりし、あの美少年同胞こそ、實は拙者と同役のもの、もし御不審と思召さば御前に於て黑白の對決仰せつけられたく、勿論この儀については、堀主水より今朝申上げしとやらむ、されど其節は唯御憤怒甚しきがため、すでに御憎味のかよりし主水が主意の立つべき筈なく、いたづらに御勘氣を蒙りて下りし心の哀れを、今は返忠の

拙者堪兼ねて、深夜かく憚りもなく』いひつゝ鬼の目より涙の一手、あはれ明成の心に染むや否や、おもへば會津の興亡たゞこの刹那にありけり、

罪なき田村兵助を縛めて登城せし甲斐もなく、障子一重を隔てゝ老の皺腹搔切らむと迫りし功もなく、果は返忠の佐藤源内を忍ばせて、けに剃刀の刃を渡る一期の切迫、明成が枕頭に涙の雨を降らせし詮もなく、かさねくの苦忠苦節いづれも水の泡と消えしのみか、却て我身の不覺となり横道となつて、いよく浮ぶ瀬もなく否運の末に、さすがの堀主水も今は何とかせむ、はやこれまでなりと思ひあきらめつゝ、我たゞ獨り身を清め衣服を改めて典厩嘉明が墓所に詣でぬ、あはれや六十二年の今日や心の訣別なりけり、
事の善惡邪正は俵おき、すでに當代の御勘當うけし上は、かなしや世上を憚かる忍びの我身、

人がましき作法なく、に恐おれば、こゝに捧けまらする一抹の香華僅かに一杓の清水なれども、ありし昔の御傍に册きし主水が心を忘れ玉はずば、さては餘人が千部萬部の讀經にもまして納受ましますむと、典厩嘉明が骨を埋めし壯嚴の墓碑を見上げて、引廻したる清淨の石座に取纏りつゝ、ぬかづきし額の砂も掃はず、残る涙を袖に包んで宛から生ける人に物いふが如く、鬼の兩眼を溢るゝ涙瀧の如し、

「そもや主水二十二の曉に草を敷寝の太刀一振なりし浪々を、なんとして何處に御覽あそばされてや、過分の御目に懸りて拾はれまらせしより、せめて萬分一の御恩を報じ奉つらむと、わづかに御馬前の塵を拂ひしばかり、これぞと申すべき働きもなきに、なほ捨て玉はで主水々と召されしのみか、果は二なきものと思召されて日夜の御側を放れず、主従とは名みの懸隔、勿體なや唯これ友朋輩に等しき御扱ひを賜はりて、あれほどの戦國に加藤の堀

と聞えし身の冥加、されば御逝去の砌にも追腹を願へき生命ながら、偏に残れくと仰せられし御言葉を守りて、二代の君に仕へ奉つりし甲斐もなく、いたづらに愚鈍の一念を立てよ空しく餘命を保つの外は、心ならずも臣節に違ひ御遺言に戻りて、六十二年の今日かよる不覺の底に落果て、しかも御勘當までもうけし身の不忠不義、あはれ何をもて謝び奉つらむ、いつの世にかは償ひまらせむ、かつての本願には、及ばすながら主水が一身を犠牲に供へて、天晴れ當代の御名を天下の重きに置きまらせ、いよく御子孫末代までの礎、これを現世の御土産として御感にあづからんと思ひしに、かなしや主水その器にあらねば萬事こゝに休して、今は老の片脚さへ踏處なき身の破滅』いひつゝ又もや見上ぐる目元は涙に搔暮れて正體なし、

「されど猶かくて息の根あらむかぎりの主水が、仆れて已むべき愚の一念を憐れの者と思召

さば、借からぬ行末の武運をも守らせ玉へや、今こゝに二代の君を捨置きまらせて此地去るは、さても不忠の上の不忠に似たれども、第一むづかしき江戸の空模様、第二には逆に取て順を守らずば所詮叶らぬ時の否運』あとは言葉もなく身を打伏して、たゞ満身の息のみを吐いたりける、

其十

いづれの大名にも國家老江戸家老の二人ありて、大藩大地の多き家には數人の老職をおき、城主は年々その間を往來して參勤交代に暇なけれど、元來會津は典厩嘉明が伊豫の松山より選ばれ、徳川家より頼まれて引受けし要害の地なれば、城主たるもの一日も國を空うせざる證として、こゝに國の仕置あづかるべき、家老の用なく、たゞ名代として江戸公邊の沙汰を勤むるもの一人、これを加藤の家には御口傳と唱へぬ、さればこゝに堀主水は世上なみく

の家老にあらずして、一萬五千石の知行は主家よりうけ、別に役料の御手當として徳川家より五千石、合せて二萬石の本身なれども、家も郎黨も無く江戸の常住なれば、本國の會津領に陣屋もなく眷族もなく、たゞ白河口黒森峠の東なる赤津の里に養生所と唱へて一個の屋敷を構へ、原新田の瀧坂に休憩所と唱へて一個の中屋敷、城下には搦手の二の口に一個の役宅、以上三箇所の家來を集むるとも平生の空巢守、三十餘人の外は、用に立つべきほどの武士一人もなく、しかも其身は忍んで不時に歸れる假の宿、さるを俄かに勘當うけて落行く體は如何あらむ、昔より人に知られし各譽の男が主の意に戻りて身を退く時には、たとひ前途に罪を謝し事を悔い腹搔切つて失するとも、まづ眼前に武道の常として領内をいづるまでは一世一代の晴業、固より白晝に武備を極めて及ばむかぎりの行装を立つべきに、あはれ世に聞えたる大剛の古兵が六十二年の夢を残して退身の今日このごろ、さぞや萬事の用意に缺けて

一際見苦しからむと思ひの外、いつ何として呼下しけむ、君の存寄に叶はで心ならずも退轉の堀主水が迎ひとして、俄かに白河口より押來りし屈竟の同勢およそ二百人、しかも小袖の下に着込を纏ひ腹巻を隠し、伊達道具先箱後車長柄打物鎗馬糶米に至るまで、すはといはど振返りて手切の證に一戦すべき猛勢、鐵砲には切火繩をかけて悠然たる有様に、加藤の藩中わツと驚いて忽ち鼎の湧くが如し、

元來が妻もなく子もなく、老の今日まで獨身質素の珍らしき男なれば、二萬石を悉く己が家來に呉れて主従ながら膠の如しと聞く、されば堀主水に狼藉の野心なくとも、その家臣は同じ千軍萬馬に従ひし猪武者の郎黨、かよらむ時の死物狂に如何なる事をや仕出かさむ、さては腹立まぎれの戯むれに荒き足音立てむは必定の奴原、油斷して不覺を取るなと騒ぐ風情に、さすがの明成も氣味わるく、思へば今日より他人の主水、まして武邊無双の場數者、

老の無念に腸亂れて狂氣ばしせむ曉は大事ぞと、俄かに人數を催して諸方の要害を固めぬ、まづ本丸の警固、大手先の守備、二の丸口、三の丸口、西は水門際、東は薬研坂、からめ手の一番より五番まで、城の四面、市中の角々、宛から陣立の如く嚴重に塞いで、今にも寄來る大敵を待つに似たりけり、

主水それと見るより使者を城中に送り、なほも忘れぬ臣節懇懃にいはしめていふ、拙者こと斯くの身と相成り、君の御不興を蒙りて落行く心に、血の涙こそあれ何として毛頭の曲事も仕るべき、さるを仰々しき御守備の體、一つには勘當家來一人を怖れ玉ふの御不覺となつて世上の聞え御痛はしく、二つには堀主水を立鳥の跡濁す者とや思召さるゝ段しみく御うらめしく、三つには物事わきまへぬ城下の民が立騒ぐを哀れと御覽あそばされずや、また白河口より押來りし二百人の者どもは、悲しや相傳の君に見放されて落行く老の影を、せめて

武士らしうせむとの心より外に何事も存せぬ徒輩、別段に御用意遊ばさるゝほどの儀にもあらざれば、偏に御陣立を引き玉ふて、主水に此上の横道めいたる名を御容赦下さるゝやう、只管懇願奉つるとぞ陳べぬ。

十文字拾遺

十文字の前後あはせて悉く腹稿を吐けば、殆ど百回の多きに渡らむとすれど、冗長の不文いたづらに讀者の感を損ふの恐あれば、こゝに拾遺と題して上中下の三回に筆ををさめ、かの美少年同胞が明成の薬籠中に入つて却て其毒を逞しうし、田村兵助の母が一死をもつて藩内朋黨の犠牲となり、香取三左衛門父子が生ながら坑にせられ、十三人の忠臣が天主閣に餓死して亡國の兆を叫びしが如き、およそ加藤家の内証紛亂はことごとく抹殺し、ただ單に門外より來れる鬼の餌となつて空しく憤死せし堀主水が末路を記するのみ、されどこの老漢一人の死は正に加藤家覆没の因果を知るに足る、讀者を乞ふ省略の意を諒せよ、

其上

汝なればこそと典厩嘉明が形見に残されて、六十二年の今日までも加藤の堀と世に聞え人に唄はるゝ大剛の古兵、固より二代の主に勘當うけて老の一死を遁れつゝ、行方も知らぬ浮世の果に落行くべき主水ならねど、眼前に迫る亡國の基は會津城中ならで、その本敵は正しう江戸の空にありと知る身の生命をしく、かつは捨てられたる我ことに愍みの未練を残さむよりは、心ならねど主を怨恨の體に立退くこそ却て主を思ふの一端、何事も逆境ぞ許させ給へと念じながら、かねて呼下せし二百人の郎黨を前後左右に従へ、いざといはゞ振返りて主従手切の一戦せむばかりの猛勢に、武備を極め伊達を盡して白晝に城下を打立ち、白河口の街道に向ふて悠々と押行く陣立の心憎さを、城主の明成天主閣より遙かに望んで、あはれ大勇大忠の苦節を知らねば忽ち烈火の如く怒りつゝ、おのれ老爺、我に見放されたる悲歎の姿しほくと人目なき夜中に立去るべきを、これ見よがしの青天に武具を輝かすのみか、後足

に砂を蹴る犬自物とは彼奴が振舞、古今ふしぎの奴かな、場數者として何程の事あらむ、やをれ者ども追掛けて寸隙もあらせす一様ゆらくと疎落し、あの白髪首持來れと大手先を固めし五百人の勢を繰出せしが、堀主水それと見るより涙ながらに馬の頭を立直し、瀧阪の頂上にて待受けて、どつと一齊に空鐵砲を放ちしまよ、なほも追來て怪我させんも心憂しやと、前途の橋々を焼落し、會津の領もことに終れる唐澤の關所に着きしころ、武具を悉く番人にあづけていふ、此たび御勘當をうけし堀主水たゞいま罷り通る間、このよし急使をもて言上せらるべし、但しこれまで持參の武具は全く君に敵せぬ後日の證據、よく見られよ、鐵砲は空筒、弓に弦なく、長刃鎗の刃を削りて木刀にも劣れば、あはれ猫の子一匹も覺束なしと笑ひぬ、

唐澤の關所を打越て、その夜を勢至堂の宿に明しつゝ、二百人の勢を十組に分けて前後おの

おの五里の間に歩ませ、いざ事ありと聞かば忽ち一團となるべき武者立、親しく堀主水が身に添ふものは田村兵助と返忠の佐藤源内、笠ふかく草鞋の緒を占めて宛がら田舎武士の物詣に似たりけり、さても指す方は何處ぞ、江戸と思ひの外の相州鎌倉といひぬ、

其中

諺にいふ可愛さ餘つて惜さの百倍、おのれと思ふ心には佛も鬼と見ゆるの比喩、されば堀主水が人しれぬ苦節の涙も、明成が僻目には一きは憤怒の種となりつよ、突鐵砲を放つて追手を劫かしたるのみか、領分境の關所に及もなき武器を捨て立退きし振舞は、いよく不敵の横道を極めて飽まで我を小兒の扱ひ、おもへば斯怨恨なんとして呉れむ、けに前代未聞の狼藉よ、日本國はおろかのこと唐天竺に渡るとも、捜し出して眼前に縛首うたすば此明成いづこに立たむ、やをれ誰にもせよ主水を擲捕らむほどの者には、彼奴が知行の十分の一

を恩賞として、千五百石たしかに三代の子孫に傳ふべし、もしまた江戸に聞えて事むづかしからむ曉は、明成みづから罷り上つて將軍に一言いはむのみ、主に反いて立去りし不義の奴を屠るに偕も何者の喙を容れむと、烈火の如き猛勢に躍りあがつて無念の膺しほれども、當家に仕へて無事の時に怖ろしき堀主水、まして今は老の立場を失ふたる死物狂の古兵、なまなか馳向ふて白刃の鏑とならむ危ふさに、唯一人の座を進んで承はらむといふものなく、會津四十萬石の諸士いづれも啞となつて黙々たる中より、こゝに十三人の武士が生命も不用たど君の御ためとて進みいでしは、悉く五十前後の半白にて平生は御意にも叶はぬ徒輩なれど、かゝる時には流石に忘れぬ昔の骨節、あはれ今の若輩が御用に立つは花の御宴の席上ばかりと笑ひぬ、

明成やうく眼前の憤怒を収めて笑を含みつよ、千五百石の外に汝等おもふまよの恩賞は手

柄の後、まづ片時も早く追掛けよ、油断して不覺を取るな、領内ならば兎に角も他國他藩の耳も目もあり、同うは怪我もあらせず無事息災に生捕り來よと、重ねぐの仰せを承けて俄かに打立ちし十三人の徒輩が、唐澤の關所をいづる時またその番人に一封の書を残していふ、君を欺くの罪は恐あれど、我等も典厩公が御膝下に育ちしもの、所詮當今の御家風に仕へて甲斐なければ、これより身の暇賜はつて堀が成果に従ひ、せめては冥途の先公に御謝罪仕らむと、其まゝ通れて行方も知れぬ振舞に、さらぬも無念の明成はつと狂せむばかりに憤怒の涙を注ぎつよ、さてもく、老爺奴、いづこまで我を踏躪るやらむ、いきながら其肉を食ふとも飽足らぬ奴、かつは枝葉の十三人も憎し、まづ残れる妻子を縛りあけて坑にせむと、三軒の家宅に踏込めば猫の子一疋の影もなし、

こゝに堀主水は涙もろとも會津を去つて相州へ落行く道すがら、人しれず江戸に立寄りて時の大老が許へ忍びゆき、豫てより思ふ最後の計畫、老の血をもて認めたる一通の歎願書を差出せしまよ、なほも二百人の郎黨を引連れて鎌倉の建長寺に入り、その妻子眷族は松岡の東慶寺といへる尼寺にたのみつよ、たゞ偏に大老より來るべき血願書の成否を待ちぬ、

其下

相州鎌倉の建長寺は争鬪禁制の靈場として追手の踏込むべき憂なきのみか、時の上人は典厩嘉明が生前無二の信仰にて、堀主水また會て師父の禮を取りし由縁あれば、ことを暫しの假の宿とたのみて其寺家に寵居し、日夜たゞ身を謹み心を慎んで江戸の空を望みつよ、はや膏肓に入りし會津の疾病を救ふべき良藥は此の一劑と大老へ差出せし血願書の成否に最後の運命を賭けて、およそ一月あまりも待ちし甲斐なく、あはれ其苦忠苦節また破れて萬事休せる奈

落の底に、さすがの主水おもはず老の大息ふいて、嗚呼やんぬるかな、されど我一命の生あるからは此まよに碎けて仆るべきや、まことの大勇は死を怖るゝに似たりと、二百人の郎黨に後事を含めて四方へ散せしめ、わづかに十人の従者を引連れつゝ東海道を落行きしが、此時なほ田村兵助と返忠の佐藤源内は身に離れず、またかの松岡の東慶寺にありし二百人の妻は、おのが良人に不覺あらせじ老たる主に慈かの哀れを残させじとや、悉く世を捨て髪を剃つて尼となりし當時の慘憺非境いかなりけむ、

父左馬助儀、権現様台徳院様の御世二代へ御奉公だての邊を思召さば、その子たる式部少輔に不器量の御尤めありとも、あはれ身持御穿鑿の段しばらく御宥恕遊ばされたく、もしや所詮のこと、寛仁の御政度にも叶ひがたきほどの否運に候はゞ、せめて半知なりとも下しおかれて、加藤家相續人を他より相立て申したしと、この外に將軍家の幃幄を見抜きし二十三箇

條の願文、しかも血に認めて大老へ差出せし主水が最後の苦忠は、忽ち水の泡と消えしのみか却て一倍の敵を求め、會津四十萬石の運命いよく追つて風前の燈火となれる悲しさに、今は天下に誰を頼まむ由もなく、日夜たゞ東海道を奔つて涙もろとも紀州若山の城下に駆込みぬ、

をりしも紀伊大納言頼宣が劔法の師に笹田右近といへるは、むかし主水と共に草を敷寝の朋輩たりしのみか、頼宣また豫てより主水が大剛の名譽を慕ひしかば、ふかく其苦境を憫れみ其苦忠に感じて、なんとやらむ萬事の後盾となりし風聞を、傳へて會津の明成が耳に入るや否や、明成さらに一段の血眼を張つていふ、ふしぎの紀伊殿が振舞かな、いかに將軍家の親藩なればとて、主に反いて逐電せる不義者を構はるゝ條、さては此明成の面皮を踏んで争鬪を挑まるゝにや、よし我も四海の雄と唄はれし加藤孫六が長子、何をか憚り誰にか怖

れむ、老爺奴たとひ鐵壁の中にありとも踏破つて掴み來れと、俄かに三百人の兵を選んで紀州へ打立たせぬ、

紀伊大納言は世に聞えたる活氣の曉將、それと聞くより冷かに笑ふていふ、さてもく式部少輔は父に劣りし案外の白痴者、己が家の柱石を逐出すさへあるに、なほまたこれを捕へて屠らむとするのみか、今は此頼宣を規て螻蛄の斧を弄ぶ狂體、やをれ者ども用意せよ、會津臭き奴原一人にても我領内に踏込まむ曉は、容赦なく脛腰打碎いて粉にせよや、堀主水を高野山の文珠院に送り、國境の紀見峠に番兵を置き、白刃に鼻油ひいて待受くるとも知らぬ會津勢三百人おのゝ姿を窺し身を變じて前後に人目を忍びつと、はや紀州へ入込まむとするを四方より取圍み、悉く搦め取て若山の城下に引きつと、十日あまりも押込めし後ばつと一時に追放ちしかば、三百の會津勢ながら海鼠の如くなつて遁歸り、その中の頭領池田三

郎兵衛以下九人まで途中に腹切て失し敗亡に、さらぬも一徹短慮の明成くわつと狂ふて五體を躍らし、やア此上は家も身も何かせむ、いきて此の耻辱に逢はむよりはと叫びぬ、

加藤式部少輔明成は前後を忘れて無念の腸破るよまよに、一通の願書を將軍家に差出していふ、私家來堀主水こと、重々の不義を働いて紀州高野山に遁込候間、先達召捕の者を差向候處、如何なる御主意に候や紀伊殿これを支へて理不盡の御振舞有之候ため、私一分ここに相すたり申候、就ては改めて再び捕方を差遣はし候上、高野山中を搜索仕りたく候へども、此度は自然あらしく相成候やも難計候まよ、此段御願かたぐ御伺ひ申上候、もし此儀御聞濟不相成候上は、たとひ所領四十萬石を召上げられ候ほどの御尤めを蒙るとも苦しからず、私一存にて飽まで所思を貫徹いたしたき覺悟に御座候、との文意

なりけり、
さればとて江戸より紀伊大納言に傳へ、頼宣またこれを堀主水に傳へつゝ、且諭して自殺を
すよめしが、主水さらに従はず、はらくと泣いていふ、事は心と違ひ忠は不忠の今となつて
徒らに我まゝの死を潔うせむよりは、せめては怒れる主が眼前の俎上に乗つて果てむのみと、
みづから身を縛して田村兵助もろとも江戸に檻送せられ、またあらためて江戸より明成に賜
ひぬ、

明成は所領四十萬石に代へ我一命に代へてもと思ひし堀主水を受取るや否や、物いはさむも
無念なりとて水銀を口中に注ぎ、舌嚙切つて失せむも心外なりとて哀れや六十三の今日まで
も残れる齒を抜き、そのまゝ縛りあけて輿に投入れ、これを庭前の松に吊して揺動かすこと

三日三夜、その下に田村兵助を引据ゑて首を打ちぬ、

されど大剛の主水さらに惱亂せず、やがて引卸されて刑場に臨まんとする時、さすがに見え
ざる眼を見張りて縛取の卒を顧み、わづかに残れる聲を血と共に絞りだしていふ、主水不
運にして斯く君に憎まれ奉つれど、汝は左程に我を憎くは思ふまじ、さらば最期の時刻迫る
まで、しばし汝の膝を貸せよ、三日三夜ゆりうごかされて一睡も叶はざれば睡氣しきりに催
して堪難しと、縛取の卒は涙を流して聲を震はせつゝ、さてもく御痛はしきことを聞くも
のかな、曾ては我等御目通りも出来ざる下司の身、もし現はれて後日の御尤めに逢ふとも苦
しからず、いざ思ふまゝに眠り玉へ、時刻來らば呼覺しまるらせむといふ、主水うなづいて
縛めのまゝ身を横たへ、縛取の膝を枕として心地よけに一睡せし後、その芳志を喜んで刑場
に引据ゑられぬ、

明成は主水が誅戮の形状を見て慰まむとせしを、近従の徒輩これを諫めていふ、あれほどの奴が憤死の體は悪氣迸つて災を残すものと、障子の紙を破りて其隙間より覗かしめぬ、さても主水が最期の座につきし時、削手の堀川嘉兵衛なるもの、おもはず心おくれて太刀を打損じ首と肩との間を切りしかば、主水忽ち振返つて睨みあけつゝ、よく斬れと云ふが如き怖ろしの顔面に、嘉兵衛また打損じて四度の後に首を刎ねしが、大勇の士が最期の憤相は臍を破られけむ、この嘉兵衛なるもの遂に狂氣して狂死に死せしといひ傳へぬ、

堀主水が誅戮に逢ひし翌年、江戸より忽ち明成が許に使者來りていふ、其方所領四十萬石を差上げて召捕たき願意の主水を下され、おもふまよの制配いたせし上からは、もはや會津四十萬石を差上ぐるの心ならむ、かつ此ごろは病氣勝にて大國の仕置も致し兼ねるよし、さ

れど父左馬之助御奉公だてを思召され、名字相續として嫡男内藏助へ石見國に於て一萬石下しおかるゝ間、ありがたく御請いたすべく、また其方は爾後の養生專一に仕るべしとぞ陳べぬ、

明成はつと思へども南無三すでに後れたり、しかも家の柱石は己が斧にて手づから碎さし破屋、あゝ今更に何とすべき、使者と共に來りて會津若松城を受取りし當時の大名は、酒井宮内大輔忠勝、溝口出雲守宣直、丹羽左京大夫光重、土岐山城守頼行、相馬大膳亮義胤、南部山城守重直にして、さしも奥羽二州の鎮たりし名城は一夜のうちに他人手の物となり、すゞごとと落行く加藤主従の姿を指さし笑ふ世上の人に引替へ宙宇に迷ふて泣くは典厩嘉明の靈と堀主水が幽魂とのみ、時に寛永二十年五月六日、誰がうたひしやらむ、まれにとふ夜半も淋しき松風を絶すや苔の下にきくらむ、

十文字後篇完

浮舟

いかなる形状とも目に見えず、いづこの誰が所有物とも定まらず、たゞ浮世の荒浪にもまれながら、人間の運命を載せて漂ふ不思議の捨小舟、中に乗れるは稀代の怪物たる小野貞介と柳橋に腕を鳴せし桔梗屋小露の世話女房、これに對して血肉の同胞よりも更に友情の溢れし杉山章藏と、古着屋の素丁稚より身を起して一代に數百萬圓を積上げし運根鈍の權化たる田口徳兵衛老爺、以上の四人こよに合乗の一編、どこの果まで漂ふにや風のまに／＼動き出しぬ。

浮舟

二十二歳の晩、都下の新聞記者中に少壯有爲の一人物として迎へられしほどの男ながら、どう狼狽て悟り損ねたか、どう慌てゝ迷ひ出したか、その後の消息を絶ちて案外の落魄孤影、破布子二點の空腹を筑波嵐に射抜かれて師走の寒月に涙と水鼻を落せしが、また猛然として心機一轉の今日この頃は、殆ど俗界の眞ッ只中に飛降りし大悪魔の化身に等しく、人知れぬ額越の眼、じろりと光らして、縁も由緒もない無繋の他人の財産數百萬を栗餅の曲取にせんとする大膽不敵の奇謀術數、この怪物の小野貞介こと二十七日、されど元來の醜男、外觀は三十以上なり。

それに連れ添ふ世話女房お露、舊は桔梗屋小露とて、柳橋に華奢全盛の腕を鳴らしながら、玉の輿にも乗らず、色白の優男も持たず、ふとせし事より牝犬も尾を振らぬ小野貞介に底深く踏込で、一時は櫛卷の筒袖に金罽賣りまで仕て来たほどの女、當年こゝに二十八歳、一歳の年長なれど、天生の美人、まして水際の立ちし名物の果、見た目は二十三四の色香なり。いかに南瓜の當り年なりとはいへ、この男そもく丸裸一貫の素寒貧として、この女を妻に持つべき筈なく、いかに縁は異なところもありと雖も、この女、そもく金に引かれず容貌に迷はず絶體絶命の義理に迫らずして、この男を良人に持つべき筈なく、いはゞ世間普通にない筈、浮世萬人の道理に叶はぬ夫婦一對、どうした月下氷人の間違やら、されど本人さうに間違はぬ筈の眞實、乃公なればこそ、汝を女房に持ったぞ、妾なればこそ貴君を亭主に持ったとは、うかく人に聞かされぬほど交情のよい面憎い男女なり。

兩國の橋向ふ、本所の小泉町に暫し假寢の借家住居を、俄かの不意に飛出して、今は下谷の竹町に同じ借屋ながら聊か人目に立つべき門構への二階建築、わざと耳の遠い目の疎い身體ばかり達者に働く飯炊婆一人を置いて、良人は世の中に人知れぬ一種の恐ろしき自信力と活手段を持ちし奴、妻は射る矢の如き一途の氣性に花の色香を捨鉢の俠肌を生れし物凄さ、これで夫婦百年の縁はあれど夫婦五年の家を保つべき財なく、人に勝れし腕も智慧もあれど日々取るべき職業も活路もないとすれば、この夫婦の的に視はれしもの、鬼でも蛇でも殆ど助かるべき筈なし。

あはれ小野貞介をして、月賦洋服に腰辨當を甘んずる男になれよとは、逆も行ひ難き註文な

がら、せめて其大膽と其才氣を縮めて尋常一般の道に用ひさせたし、あはれ小露をして、ほろ着物に味噌こし箸を提げた裏長屋の嬢になれとは、いかにも無残なる強迫ながら、せめて其容貌と其氣風を危ふからぬ世間普通の女の道に用ひさせたし、

本所の小泉町を俄に去つて、今この下谷の竹町に家を構へしより一月餘の一朝、庭前傳ひの植込を隔てし門前へ、不意に傳の楯棒を卸せし音、

折しも小野貞介は出で、耳の遠い目の疎い飯炊婆の外、小露たゞ一人、門の扉の開く音に思はず眉を擧めながら、そつと起つ内格子の半窓より差覗く顔を、入來りて何氣なく見上げしは、きのふの夢を柳橋に取残せし妹分の小定、さも懐かしけの一言、まづ脚下よりも口を

先走りぬ。

「あら姉さん」

只この一言、いかに今の身の小露が胸に人しれず徹へしか、

あれほどの華奢全盛を捨てよ紺の筒袖に櫛卷姿のまよ金罌を賣歩きし時はいはねど却って世間に對ふ必の自慢、いづこの誰にも憚からず、いそぐとして迎へしが、また舊の身に劣らぬ絹布を纏ふ常着の今は、ふしぎに何とやら打濁れながら、やうく淋しき微笑を浮べて、久しぶりの小定を奥の一室へ誘ひぬ、

「定ちやん、よく訪ねて来てくれた事ねエ、實は妾も逢ひたかつたのだがね、その後いろいろ時と場合に都合があつてさ、あの小泉町を不意に出たまふま、わざと御無沙汰を仕たの

よ、さぞ馴染甲斐のない女だと、お思ひだらうが、つまり御無沙汰をした方が却つて、相方のためになるかと考へた理由もあるんだからね、決して悪く取らないやうに、ね、しかし暫く見ない間に大變、すべての調子が冴て來た事ね、段々と貫目が付て來たよ、近しく音通は仕ないが定ちやん、いつも蔭ながら忘れては居ないんだよ、相變らず全盛だらうね、

おッ母さんも達者だらうね」

人の家庫を採潰して手柄にならねど、さのみ罪とも恥とも思はぬ藝妓家業には、案外に優しく小弱く涙脆い女、じつと小露の面を打守りながら、はや目に持つ一帯を膝に落しぬ、

「姐さん、妾、わざく何も、そんな氣で不足を言ひに來たンぢやアないンですよ、外の女と違つて姐さんのこつてすもの、知らして下さらないには、下らない理由があるだらうと、

そりやア充分、承知しながら、たどね、あの後、どうして居なさるかと思ツて、さんざ探
しましたよ、しかし小泉町より立派です事ね、また姐さんも、それが相應の風俗ですよ、
第一まア丸鬻が、よく似合ツてよ、ほよよこれて妾、安心しましたワ、時に小野さん、
どちらへ、お不在ですか」

小露、猶更ら苦しげの體、いきくと晴渡る平生の目元も、自然の伏目勝に思はず差俯いて、
ドンよりと花の色香に雨曇りの風情、浮世繪の名筆を脱出でたるが如し、

「あの良人は今朝、早く、どツかへ出かけたが今に歸るだらうから、久しぶりで妙な顔をし
て例の通り頓狂な暢氣な馬鹿口を聞く工合、藥にもなるまいが見ておいでよ、それに付て
定ちやん、この丸鬻が妾に、さうよく似合ツて、また小泉町より少しぐらゐる家らしい家で、

妾のため、そんなに安心してくれるの、うれしいは嬉しいが、また身に取ツて、いふにい
はれない苦しい、つらアい事があるんだよ、あゝ木綿着物で無沙汰もせず此方から押掛け
て喜ばれるやうな身體になりたかつたねエ、なれば出来る身で居ながら、わざと好き好
んで、仕舞た事をしたよ」

秋の暮に凋れし桔梗の花一輪、何とやら小露の浮かぬ顔色を見て、血を分けし同胞ならねど、
柳橋に取残されし妹分の小定、おもはず眉を擧めぬ、

「姐さん、何か心配な理由でもあるんですか、ドンな火水の中でも目色を變へた事のない姐
さんが、結句あの小泉町より立派な家になつて、久しぶりの妾に逢ツてふしぎですなエ、
木綿着物で無沙汰もせず此方から出かけて、喜ばれるやうな身體になりたかつたとは、も

し小野さんが近來、姐さんへ對して氣心の外れた事でも、なすつたんですか、外のこつて普通大定な理由で、さう急に淋しく愚痴の出る姐さんぢやアないんだもの、それなら妾、小野さんに面と對つて、言ひたい事が澤山あるんですよ、柳橋の名物に唄はれた姐さんを、紺の筒袖で櫛卷の金鍔賣にまで仕たのは、唯の業です、あの時だつて妾、心の中では口惜くつて、口惜くつて堪らなかつたんですよ、しかし本人の姐さんが、見どころあつて何も個も承知の上、あゝだと思へばこそ、自分の初心に遠慮して居たんだもの、今かうなつて萬一、邪慳な事でもなさる小野さんなら妾、いくら目下だつて此まゝ黙れませんワ、なぜ姐さん、さう小野さんに弱くなるんですよ」

持つて生れし意氣地のあるだけ猶更辛き小露の風情、さも苦しげに差俯きし顔面を、やうやうあけて、水際の立らし眞白の頬に態とならぬ鬢の毛の一すぢ二すぢ、年は二十八といふ天

生の美人こゝぞ生命の中央、身は浮世の裏表を通りぬけし華奢全盛の餘波、なるほど丸裸一貫の小野貞介に苦勞するとは、ふしぎの因縁、誰が目にも勿體ないほど惜しい女なり、

「長の歲月、いくらも世話して來た妓のある中で、そこまで妾を思つてくれるのは定ちやん、一人だよ、嬉しいつく思つてるよ、しかし妾の浮かないのは何も、あの良人の故ぢやアないのさ、やはり自分で自分の氣を腐らすんだからね、もし萬一、あの良人が妾に濟まない不義理な事を仕たにしろ、するに仕ろ、まだ世の中に年貢の納めきれない妾だよ、まして自分の勝手に斯うなつた今更、さう野暮に素人めいて贅澤な、他の前にまで嫌な顔を見せるもんかね、そりやア、それで始末するだけの妾だから、安心して居てほしいよ」

「ぢやア外に、どういふ心配があるんですの、やつと探し出して、久しぶりに逢つた姐さんの、さう浮かない顔を見ながら此まゝでは妾、歸れませんワ、何の役にも立たないでしや

うが、うちあけて話せば自然、また氣の晴れる事があるもんですよ、ねエ」
「有難うよ、ぢやア打明けて定ちやん、今この妾が胸裡の、苦しいことを話すがね、聞いて、おくれか、だが此上また定ちやんを泣かすだね、かはいさうに、なぜ妾のやうな運の悪い、負け嫌ひの意地の張った女を、わざわざ探し出してまで、尋ねて来てくれるんだらう、やはり苦勞性に生れたんだねエ」
どこの誰に學びし言葉ならねど、なさけに溢るよ一語一句、しみぐくと互の皮肉を通して骨に刻み入りぬ、

うちあけるよりも、思ふ事を秘して辛きは世の常ながら、また秘すよりも、打明けて辛きは隔意なき心の友、昔を忘れし今の我身一個に泣き足らで、柳橋に残せし妹分の小定が袖にまで、涙の雨を分けて降り注ぐ辛切なさ、流石に氣丈の小露も、いと凋れて語り出しぬ、
「知らすべき筈の居所を知らさないんだから、どこで、どうなつても、捨て置いて當然の妾を、わざわざ親切に探し出して、久しぶりに来てくれた定ちやんへ、かういふ浮かない顔を見せちやア實に濟まないがね、堪忍しておくれよ、長の歲月、いやな座敷で無理な笑顔を作り慣れて来た妾だが、逆も今日この頃は、胸に餘つて秘しきれないほどの辛い事があるんだよ、いはど自業自得で、外の人には口へも出せる事ぢやアないがね、聞いてくれる定ちやんも何かの因縁だらう、うち明けて話す妾も眞實、他人とは思はずに泣くんだよ」
小定、はや目に持つ涙を袖に拭ひながら、我を忘れて小膝を進めぬ、
「姐さんの胸に餘るほどの事を、妾が聞いて、なんの役にも立ちませんがね、まア兎も角、話して下さいな、背負つた子に淺瀬を教へられるといふ、ものゝ比喩もあるぢやありません」

ンカ

小露、ますます力なく首肯きぬ。

「よくまあ、そこまで妾を思ッて、おくれだね、しみじみ身に沁みて生涯忘れられない定ちやんの親切が、これで二度目だよ、妾が不意に妓籍を廢めて金鰲賣になつた時、あの小泉町へ押かけて来て口惜まぎれに泣きながら、あの良人を怨んでくれた事があつたねエ、どうか一日も早く小野さんが世の中へ出て何か爲さるのを見せて下さい、それを見ない以上このまゝでは腹が立ッて堪らないと、自分の事のやうに身を震はして、泣いてくれた事があつたねエ、おかけで、どうか斯うか金鰲を賣らず、紺の筒袖も脱で櫛卷の頭を丸髻にしたことはしたがね定ちやん、考へて見ると、今更舊の藝妓にもなれないが、やはり氣樂な金鰲賣になりたいよ、實はね、妾、あの良人に、末は兎も角、今まだ斯うして貰ひたい心

算ちやアなかつたのよ、女の差出た世間の逆倒かア知らないが、妾の方で、出来るだけの苦勞をして、どんな男になるか一番、あの良人を仕上げて見たいのが妾の量見だつたのよ、さもなくて定ちやん、いくら好奇心だつて馬鹿々々しい桔梗屋小露ともいはれた女が面の皮厚く金鰲まで押賣して歩けるかね、その金鰲の押賣を結局、却ッて氣樂に考へる今の妾だもの、よくくの事さ、つまり今これが正當の道筋で、夫婦の分相應で、第一あの良人の腕のありツただけで、そして無事に養はれてる妾なら、そりやア櫛卷の筒袖よりは嬉しいがね、實は定ちやん、とんでもない大きい希望のあり過ぎる良人で、加之も世の中を何とも思はない無鐵砲の性質だからね、この上この妾に、うんと盛粧をして、いはど剃刀の刃を渡るやうな危険な場所で、身を捨鉢に働いてくれといふ恐ろしい註文だよ、また働かずに居れない結果となつたんだよ、なアに只一言、否だといへば、あの良人と別れるだけの

事で済むんだがね、末練も何もないとして、それさへ出来ない理由といふは定ちやんも知
ツてる通り妾等夫婦のため縁を繋いで親とも兄ともなツて居て下すツた例の杉山さんね、
あの方に對して猶更、辛い、苦しい場合があるんだよ、戀の文句ぢやアないが、彼方が立
てば此方が立たず、中間に置く身の遣る瀬なさで、この妾も二十八の最終が、どうやら運
の末らしいねエ」

善き事ばかり笑ひ合ふ世間の友とは違ひ、悪しき事まで打明けて泣き合ふ心の友の苦しさ、
その貰ひ涙を袖に包みかねて目を腫しながら、下谷竹町の小露が家を立出でし小定、待たせ
し俵に物憂き身を運ばれつと柳橋への道筋、今しも和泉橋を渡らんとする前面より、歩み來
る洋服男は正しく小野貞介なり、

今は小泉町にありし時の小野貞介でなく、薄茶色の中折帽子に駱駝の外套を纏ひ、セビロ服
の縮ズボンに編上げの赤靴、銀巻のステッキを小脇に挟みながら、消えしマニラの葉巻にマ
ツチの火を拵付けんと立止りし體、それと知りて見る人の目にもよるが、元來の美男ならぬ
面魂が却つて一種異様の貫目を添へし容貌、同じ當世風なれど、いはゆるハイカラでなく
蠻カラの標本的、どうしても一癖あるべき男なり、

小定、かくと見るや否、俄かに俵を止めて身輕に降りながら、胸帯の間より掴み出せし祝儀
を其まゝの後ろ手に車夫に渡しぬ、

「ちよいとね、急に用が出来たから先に歸ツて下さい、些少だよ」
わざと急ぎ足に離れて廻り、背後より不意に聲をかけぬ、

「小野さん」

小野貞介、ふしぎに此奴、いかなる場合も物に驚かぬ男、じろりと振り返りぬ、

「や、珍しいね、どこへ行く」

「憎らしい事、平氣に澄し込込でさ、よく言へますね、珍しいとか、どこへ行くとか、貴君こそ何處へ、第一また今、どこに住んで居らっしゃるんです、姐さんも姐さんだが、貴君も貴君だワ」

「すまない、直に知らせる筈だったかね、つい紛れて」

「筈といふ言葉に、ろくな挨拶のないもんですよ」

「おい、往來だぜ、さう喧嘩腰になつてくれるない、小路も君の事ばかり陰ながら、言ッてるよ」

「ほよよ暫くの間に、お世辭が宜くなりましたねエ、流石お仕込手が違ッてるから」

「いづれ其うち、此方から、たづねて行くだらう、その節あらためて御通知しよう、實は今のところ、いろいろ都合があつてね」

「どっこい、小野さん、いけませんよ、その術は喫べませんよ、さアこゝで妾に目ツかったのが運の窮極です、さう御都合があれば押して今、お宅へ伺ひませんか、御迷惑でしやうが妾の行くところまで貴君、来て下さい、是非、お聞き申したい事があるんですよ」

「いや、今日は外に急ぐ用があるから、御免を蒙らう、きつと其うち此方から出かけるよ」

「ぢやア妾を今日お宅へ連れて歸ッて下さい、姐さんに喰付てあけないと氣が濟みませんよ、

もし貴君、外に御用があればどこへでも御同伴に行きますからね、なアに門口に待ッて居りやあ別段、お差支へは無いでしやう、それとも貴君、姐さんに秘して女の連れて行かれない、變な怪しい家があるんですか」

「ばど馬鹿な、道路の中央で難題を持ちかけちやア困るよ、おや、放さないか、人が見るよ」
「放しません、妾のいふ事を聞いて下さらないと、かまはず取ッ付いて大きな聲を出しますよ」

いざとならば鐵壁も突破るべき小野貞介ながら、やけに往來で取ッ付かれし小定のため、其まよ引摺られて近處の料理屋へ連れ込まれぬ、
元來醜男なれど、のツそりとせし横平面の蠻カラ男一人に、かくされぬ妓流の色香こよに十二三の美人、見た目に間違のない筈と、實は間違はれて氣を利かされつゝ、わざ／＼奥庭の離れ座敷へ案内されぬ、
「はよよと變に勘違ひをして、こんな座敷へ押込んだ工合だね、この様子ぢやア氣を落すに

及ばない、小野貞介まだ外で女が出来さうだ、はッはよよよ」

「小野さん、相變らず貴君ア、いつも暢氣ですネエ」

「今更この野郎、急に凋れて、しほ／＼としても可愛氣が無からう」

「いゝえ、少しは貴君、しほらしくね、悄然となさい、可愛氣が出なくツても、段々と自然に、その恐ろし氣が取れて來ますよ、姐さんのことを知ッてる故か、妾のやうな腕のない初心な女は、うす氣味わるく怖クツてなりませんワ、もし妾が貴君の情婦だツたら、どうでせう、今頃は焼くか煮めか、思ふ存分に殺されて仕舞ツて、骨も残りますまいネエ」
「おい／＼、外に用のある男を往來の中央から不意に引ッ張ツて來て、何を、いふんだい、戯談は其うち隙な時に、ゆる／＼聞くとして、全體この乃公に、どんな談話があるんだ、兎も角も早く、おッ放して貰ひたい」

「まア小野さん、出た盃を手を取って下さいな、お氣に入りますまいが久しぶりで妾、お酌」

「飲むよ、飲むがね、その談話を」

「宜いちやアありませんか、さう急に何も他人らしく、なさらないで、不束ですが姐さんの妹分いもごぶんで柳橋やなぎはしに残のこッてる桔梗屋小定ききやうこさだが、その姐さんの情人こいびと、いはゞ貴君妾のため兄さんですよ」

「ふざけちやア困るよ、今この乃公のこうを鬼のやうに、殺されるとか喰はれるとか、さうさ酷い事を言ッて置きながら、すぐまた兄さんかね、はよよ」

「おや、さうでしたね、ちやあ兩方取りやうはうとつて鬼のやうな兄さん、これで、どうでしやうかね、ほよよ」

「鬼のやうな兄さんで宜いからね、こゝまで乃公を引止めた談話があるなら早く仕てくれ、

小泉町こいづみちやうに轉ころがッて居た時の小野貞介おのていけいと違ちがッて、實際じつさい、今日は外ほかに用ようがあるんだよ」

「あら、小野さん、怒おこッて居ゐラッしやるの、すみません事こと、つい貴君あなたお心易こころやすいに甘あまへてさ」

「うるさいね、いちく餘計よけいな文句もんくが多くおほッて困るよ、とんでもない目めに出逢であッた今更いまさら不足ふそくをいへる相手あつてでもなし、どうか頼たのむからね、手てッとり早く搔抓かいつまンで、白しろとか黒くろとか、談話はなしの持もちを明あけてくれよ」

「ほよよ白しろだの黒くろだのッて、まるで狗いぬッ兒このやうですわね」

「や、また妙な緒ゆいが別べつに出でかッたよ、際限さいげんがない」

小野貞介おのていけい、聊いさか本氣ほんきの沙汰さたに起たンとする體ていを見るや否いな、平生ひらうの内氣うちまにも似合にあはぬ小定こさだ、するりと膝ひざを進すすめて其顔そのかほを眞正まじやう面めんより打守うちまもりぬ、

「小野さん、さう貴君あなた、お急せきなさるなら、たゞ一口ひとくちで談はなしますが、全體ぜんたいあの姐ねえさんを貴君あなた、

どうなさる御量見です、乃公が女房だと仰しやれば、妾も姉に立てた人ですよ、失禮ながら、も少し大事に扱って下さらないと困りますよ、生物ですからねエ」

今まで秘せし案外の手槍一本、すばりと鞘を拂って突出しぬ、
藝と容顔は當時どこへ出しても一流の女ながら、妓流には聊か不似合の内氣に涙脆く生れて加之も今年まだ二十歳の上を越したばかりの小定、相變らず罪のない事をいふぞと思ひの外、今まで秘せし最後の一本槍を不意に突出されて、流石の小野貞介、立しかけしズボンの膝頭、じんわりと坐り直しぬ、

「妙な事を言出すね、小露を、も少し大事に扱ってくれ、生物ですとは、この貞介、荷物扱でも仕てるやうに聞えるぜ、全體どういふところが、小露の妹分として氣に入らないんだ」

鼠の音にも飛退く平生の小定とは違ひ、いふだけの事はねば坐を動かぬ顔色、嵐に向うて咲きし花一輪の風情なり、

「小野さん、妾は貴君に叱られる筈の人間ですよ、それに何故、貴郎ア妾に、こんな嫌な事を、いはして下さるんです、いはれる貴君より、いふ身の妾が、どんなに辛いか、考へて見て下さい、實は姐さんのために御禮をいひたいのが正當の小定ですよ」

「や、なか／＼皮肉に出るね」

「皮肉でも骨付でも、さうぢやありませんか、あの姐さんは御承知の通り、あゝいふ氣性ですよ、これは妾よりも現在、柳橋の名物に紺の筒袖を着せて金鍔まで賣らして来た貴君が、御存じのない筈はありますまい、なアに、ありやア彼女の勝手だと仰しやるかも知れません、その彼女が一人身で居て、外に藝のない身體ぢやアなし、わざ／＼金鍔の押賣

をして歩くもンですか、やはり貴君といふ人が出来たからさ」

「わかッてる、その邊は充分、わかッてるよ、しかし今、この乃公が何も、小露に對して、不義理を仕たり残酷な所爲を仕た覺は無いぜ」

「無いのが貴君、手柄になりますかね、もう少し大事にして下さいとば小野さん、そこですよ」

「どこだい」

「掴み合ッても言争ッても到底、貴君に叶はない妾ですがね、馬鹿は馬鹿ながら持て出る物の道理を小野さん、よく聞いて下さいよ、今、どこに住で居らッしやるか知りませんが、

あの姐さんの萬事に晴々とした氣風で、小泉町を出たまんま一月の餘も、人に知らされないやうな工合では妾、どうも安心なりませんの、人は兎も角、この妾にも知らして下さらないには、ないだけの何か、キツと妙なことがあるンでしやう、賤しい藝妓家業こそすれ、

意氣地の金看板を眞正面に立て、柳橋を大手六法に睨み歩いた桔梗屋の小露ですよ、それが貴君、乞食でもするではなし、高利貸に追込まれたちやアなし、金鎧を賣歩く時さへ、身を隠さず立派に顯はれて馴染の御客様方を廻ッた女が、今更急に居所も知れないやうでは妾、あれほど名を唄はれた姐さんの爲に残念です、妹としての小定は猶更ら、口惜クツてなりません、もし姐さんを今までの世間へ出されない理由でもあれば小野さんどツか遠い國へ連れて往ッて下さい、なまじい東京の市中に住で居て、をかしく變な秘し物に仕られちやア、かはいさうで見居れません」

小野貞介、俄に大口あいて笑ひ出しぬ、

「はよよと大變に長ッたらしい、難かしい事をいふかと思へば、何だい、小露を世間へ出す出さないの不足かね、つまらない、はよよと」

小定、こゝぞと膝を進めぬ、

「小野さん、鐵張の函の中に入れても、出ようと思へば破ッて出る筈の姐さんですよ、その姐さんを出ないやうに仕た貴君ア、よほど酷い、怖ろしい、もの凄(こ)い術にかけて姐さんを縛ッて仕舞ッたんでしやう、つまり姐さんの氣性で姐さんの身を動か(か)れないやうに仕たからでしやう、さう苦しめずに小野さん、イツそ刃物で一氣呵成に殺してあげて下さいな、どうせ貴君に通れぬ悪縁を繋いだ女ですからねエ」

二度目の槍先、いよく小野貞介の胸元を貫きぬ、

油斷大敵、高を括ッて笑ひ半分に向ひし小定のため、おもはぬ不意の手槍を二本まで突出させし小野貞介、これが髯面の相手ならば驚(おど)を鴉(から)にしても一議論する筈の男(おとこ)ながら、織(つ)羽(は)き女

だけに猶更(なほさら)ら却ッて持餘(もてあま)せしのみか、人知れぬ心の底(こ)に一點の疚(い)しさ、たしかに餘るべき料理代(りやうだい)を帳場(ちやうば)に抛(な)込むや否(いな)、其(その)まゝ後(あと)も見返(みかへ)らず飛出(とびだ)せしが、實(じつ)は遁出(にげだ)せしなり、

さては小定め、わざと不知顔(しらずがほ)しながら、どこで聞出(きか)したか、正(ただ)しく今日は竹町(たけちやう)の我家(わがや)を訪(ま)うて來(き)たらしい口氣(くちがき)、加之(しか)も其歸途(そのかへり)に我(われ)を見付(み)けての癪(が)癪(が)まざれと思(おも)へば、流石(りやうせき)の男(おとこ)、思はず眉(まゆ)を擧(あ)げぬ。

逢(あ)はねば兎(う)も角(かく)、逢(あ)へば血(ち)を分けし同胞(どうぱう)よりも深(ふか)き二女(にに)の心(こころ)、餘所(よそ)へは洩(も)さずとも隔意(へが)意(い)なく互(たがひ)に打解(うち)けて、いはぬ筈(はず)なく、きかぬ筈(はず)なく、そもくいかなる點(てん)まで我(われ)秘密(ひみつ)を明(あ)かせしか明(あ)されしか、

たとひ度胸(どきやう)が無く(な)くて意地(いぢ)は薄(うす)くとも、元來(もとより)の性質(せいかう)、心(こころ)は優(やさ)しくて口(くち)の堅(かた)い小定(こじやう)、まさかと思(おも)へど、何(なん)とやら不意(ふい)に一人(ひとり)の敵(てき)を持ち(も)ちしが如(ごと)く、氣(き)にかよりて外(ほか)への用(もち)も捨置(すてお)き、其(その)まゝ價(ね)

も定めず辻俵を我家へ急がせし小野貞介、さて此奴としては珍らしき慌てやうなり、門口に俵を停めて、いふだけの賃錢を投與へ、わざと何氣なき體に入ればその靴音を知りて迎へ出でし小露、

「おや、お早い事、けふは一日、かよる筈だつたんでせう」

編上げの靴の紐を解きながら、振り返りもせず首肯きぬ、

「かよる筈だつたがね、途中から都合上、其用は明日に延して外へ廻つたんだよ」

帽子も外套も其まゝ居室に飛込むや否、長火鉢の前に大胡坐、

「今日は随分、寒いね、なか／＼外ア風が吹くよ、もう十二月だからなア」

「まあ良人、帽子だけでも、お脱ぎなさいよ」

「脱がしてくれ、面倒だ」

「ほよよと無精な人だ事、十二月は良人の記念日ですから、いくら今の妾にだつてさう贅澤

は言へませんよ」

「何、乃公の記念日だ」

「お忘れなすつたの、兩國の廣小路で、ぴい／＼と北風の吹く夜、師走の月が氷るやうに冴

て居て、ほよよとその時、良人の水鼻が、妾と縁の原因でせう」

「つまらない、馬鹿な事を云ふぜ」

「だつて、さうですもの、あの時の水鼻をしみ／＼氣の毒に思つて、つかうなつたんです

からねエ」

「はよよとちやア水鼻の記念日として、今夜酒でも飲まうか」

「それも、さうですねエ」

今日あの小定が来たとは顔色にも出さず、その小定に途中で逢うたとは氣振にも見せず、双方いはす語らず互に心と心の糸を引合ひぬ、

長火鉢を隔てゝ冬の夜の小鍋立、もはや寝るより外に用のない酒の上、ほろりと酔うて誰憚からぬ夫婦の交情、これで此上の希望さへなくば、人間萬事これほど氣樂な境涯なけれど、その男は小野貞介といふ浮世の一曲物此まで承知すべき筈なく、女は名物藝妓の果、たゞの世話女房で濟むべき筈なし、

「さア水鼻の記念日も、まづこれで無事に濟んだ、はよよ寝ようか、花は半開、酒は半酔、すぶろくに酔つて仕舞つちやア味がなまいよ」

「ちやア味のあるうち、この邊を花として寝ませうか、しかし今夜ア何だか妙に目が冴えて、

睡くありませんよ、どうしたんでせう」

「睡くない、もう十一時だぜ」

「話したい事ね、白晝、眞面目に對ひ合つてる時よりも、かういふ夜が却つてしんみりと談話に實の入るもんですよ、いろく思ひ出してね」

「や、あまり實の入過ぎた談話は閉口だ、第一また陰氣だ、いろく前の事を思ひ出されちやア猶更巾の利かない乃公だからな、はよよ別に差當つた用さへ無きやアやはり陽氣に、ばつとして罪のない談話が面白いよ、それも實ア寝ながら承はりたいもんだ、うとくと夢うつゝに心持よくね」

「贅澤な事」

「金錢の入らない贅澤だよ」

「爺ッて良人の談話は、いつも暢氣に馬鹿々々しく罪が無さ過ぎて困りますよ、そのくせ心

「は、恐ろしい、罪の深い事ばかり謀ンでさ」

「おい、おい、また變に擲出すよ、今更深いも浅いもあるかね、かういふ工合に生れつい

た男を覺悟の上で、かうなツたンぢやアないかね、素人くさい、考へて見るが宜い、時間

拙勤の月給虫で其日を生きてる人間ぢやアなし、安心して懐手で喰ふだけの財産はなしさ、

「宛れて世の中へ出ようとすりやア、どうせ満足な眞ッ直な大道は歩けないよ、少しくらゐ

の怪轍ア承知で、人の知らない近道を走るンだ」

「それやア充分、わかッてますよ、浮世は良人より先へ出来たもンで、後から出た良人が、

「その先へ出来た浮世を自由に仕ようといふンですから、たゞ世間普通の業で仕遂げられな

い事は知ッて居ますよ、いづれ無理な術で行く事は承知して居ますがね」

「居れば、それで宜いぢやアないか、だしぬけに今夜、こゝで始めて不意に相談したこッて

「無し」

「知れた事お言ひなさい、誰が良人、だしぬけの不意に、そんな恐い事を相談しられて堪

りますかね、前途茫漠の自棄半分に捨鉢の妾なればこそ、大定の女は目を舞しますよ」

「だから、目を舞さない汝を見立て、急きもせず、ゆるくと前以て相談してゐぢやアない

か」

「とんだ御見立に預ッてまア嬉しいことね」

「そこが縁だよ」

「悪縁ですな」

時に取ての幸ひ、酒といふ味方を其場の楯にして、さのみ酔はねど、わざと苦しげの體、こそくと這出しながら、蟹の如く夜具の中へ遁込みし小野貞介を、じろりと尻目にかけてし小露、其まゝ長火鉢の前に居残りぬ、

「男といふものは勝手なもんですねエ、いくら大切の談話でも何でも構はず、少し自分の都合が悪くなりやア、すぐ外して仕舞ツて、それですよ、なるほど、横に寝るといふ言葉は、かういふ時に用ゐるんでしやう、實は起きて居て眞面目に受けきれないから、身體を横にするばかりでなく、心まで横に抛出して人を困らすんですねエ」

「いよく夜具の中へ首を締めながらの聲、

「酔ツて苦しいんだ」

小露、振返りもせず鼻頭に笑ひぬ、

「馬鹿になさいよ、これだけの御酒で、それほど酔ツて苦しい人か人でないか、ほまゝまた一度で相手の酒量を間違はずに見ぬいて来た妾が、丸一年越の良人ですよ」

「なアに酒は分量でないよ、その時の工合で、身體の調子だ」

「どんな調子」

「兎も角も今夜ア、おせいぜ、明日の朝に願ひたい」

「もし今夜のうち、良人と妾、どっちか死んで仕舞やアしますまいかね」

「おいしく、汝こそ人を、馬鹿にするんだぜ」

「だツて、平生の調子と身體の調子が違ツてるんでしやう」

「や、逆も叶はない、今に始まつた理由ぢやアないが、兎を脱いで降参だ、どうしても汝は乃公より飛ぬけて、すつと上手だよ、取組が違ツてる、ふよよと」

「おいて下さい、よくまあ、さう易々と兜を脱いで降参する良人ですか、ちよいと、口でこそ、をりく怪我の拍子に勝つことありますが、心では妻の方が脆く降参してるんですは、それも尋常に兜を脱ぐ隙が無くて、かはいさうに兜を着たまゝ捻伏せられての降参ですからねエ、第一其證據は現に今も、取組が違つてるといふ口の下から、ふよよとは何です、餘り平常に聞馴れない變な笑ひ聲です事」

「液具の中で小さく恐れ入つて、もぐり込んだまゝ笑つたから、ふよよと聞えたんだよ、面を出して笑やア、この通り、はよよ、だ、ね」

小露、俄に差俯いて、ほつと思はず吐息を漏しながら、聞くなでもなし、聞けてもない獨言、「あゝ考へて見ると、つまらない、これが世間普通、ちやんとした媒酌人があつて四海波め、おたく三々九度の盃をして來た夫婦なら、まるで喧嘩さ、しかし戯談が喧嘩になるくらゐ

「だから萬事が眞面目だ、それとは反對で何故かう規矩のない、だらしない、をかしく妙に角の取れ過ぎた夫婦が出來だらう、やはり世の中は野暮と不粹に限りますねエ」

「夜具の中より、ぬつと首を擡げぬ、

「變に此ごろア、ちよいと面白くない言葉が出るね」

噫、よまで盡せし甲斐もなく、我生涯に一人の惜しい朋友を捨てたり、その妻として面白い女を捨てたりと、小野貞介夫婦のため一種いふにはれぬ悽慘の情に迫りながら、以來こゝに疑ひもせず探しもせぬ杉山章藏、

久しぶりの柳橋を渡りて、馴染の深い或料理屋の奥座敷、不意に情婦の出來る夜だから手を鳴すまで來ちやア不可よと、相變らず捌けて輕う灰汁のない男、その相手は例の桔梗屋小定、

これも急がしい身を人しれず脱けて来て、おのが勝手に慾の外のお座敷なり、

「お久しう御座います事、どう遊ばしたか暫く此方面へ入らッしやいませんね、さう貴君、

薄情に振捨てるもんぢやア御座いませんよ、ほよよよ」

「なアに柳橋の方角は忘れないがね、振捨てるにも吸付くにも、的のない乃公だよ、ほよよ

はしかし今夜は的になつてくれる覺悟で、わざ／＼あゝいふ手紙を寄起したんだらうな、

もう、そろ／＼苦勞の種を蒔く年齢だぜ」

「貴君さへ、妾で御不足が御きやア、種を蒔くも面倒ですから、すぐ此まゝ苦勞をさして戴

きたう御座いますワ、ねエ杉山さん、ほよよよ」

「や、うまくなつた、そこだ、その呼吸だ、なるほど、よく見ると僅かの間に何處となく尾

鰭が付いて来たよ、容貌は天生だから申すに及ばすね、たしか二十二だつたらう、また名

物が一人、この柳橋へ出来るわい」

「杉山さん、嘘にも貴君、そんな事仰しやると根が馬鹿ですから、本氣に受けますよ」

「いや眞實だ、なるだけ重く萬事に位を取つて、うかく身輕に情夫を拵へるな、もし辛抱

が仕切れずに拵へる場合は、さしづめ乃公のやうな年齢の違つた約束の違はない親切の男

が宜いぜ、ほよよよだうだい小定」

「ですから今夜、あんな御無理を申上げて来て戴いたんですよ」

「はよよと戯談は置いて、全體、何の用だい、どういふこつたい、實は此ごろ閑暇のない身體

でね、ちよいと夕飯かた／＼、出かけて来たのさ」

「まア恐入りました事、失禮な、妾風情がお呼び申す筈では御座いませんかね杉山さん、ま

だ不意に伺つても、變なもんぢやう、ですから、つい仕方なしに貴君」

「そりやア、どうでも宜いから、もう酒を止して飯を喰ひながら聞かう」

「おや御飯、まだ貴君お早いでしやう」

「何、談話の都合で、また酒にするさ」

「ほよよいやな談話なら、すぐ遁仕度ですの」

「遁けも仕ないが、實際さう長く居れないんだよ」

「それでは、お心易いに甘へて少しも飾らず、ぶツつけに萬事お談話いたしますが實は杉山

さん、妾が一生のお願、助けて下さい、もう斯うなれば貴君の外、あの姐さんを助けて下

さる方は無いんですよ」

杉山章藏、俄に眉を擧めて箸を置けば、小定、我を忘れて小膝を進めぬ、

おもはず眉を擧めて座を乗出す杉山章藏、こよと我を忘れて小膝を進めし小定、猶更兩手を合して拜みぬ、

「杉山さん、この通り妾これです、貴君の外あの姐さんを助けて下さる方は無いんです、貴君の外あの小野さんを押へる方ア無いんですから」

「おい／＼手を合して、そんな真似をするに及ばない、もし助ける道さへありやアどうしても助きたい乃公だ、惜しい夫婦一對を捨物にして、實ア人知れず心に泣いてる乃公だよ」

「ですから杉山さん、是非お願ひするんですよ貴君に限るんですよ」

「しかし、無効だらう、今更、そんな事を他に頼まれなくツても、此杉山章藏、力のあらんかぎり及ぶかぎりの友誼上、するだけの事を仕盡して来たんだ、出来るだけの義理と人情に堰止めてね、さんざ諫争しぬいた結果だ、あの小泉町を不意に飛出したのも、實は乃公

への苦しませに遁けたんだよ、その後、ふと一夜、銀座で小野に出喰したから、これ幸ひと引摺って歸ったが、また取遇して以来、流石の乃公も匙を投げて仕舞ったのさ、下谷の竹町邊に居るといふこつたが、もう二度と再び出かけて往って無用の力瘤を入れる勇氣がない、つまり乃公の生涯にまたと得難い惜しい朋友一人と、面白い女一人を失ったよ、それも根が物事の分らない馬鹿で、たゞ一時の間違つた量見なら、根氣よく幾度でも争つて見るがね、夫婦とも浮世の裏表を砥盡した苦勞人が萬事承知の上で、加之も萬一、遺損へば、斯うといふ最後の覺悟まで極込んで、度胸を据ゑた相手だから困るよ、いくら騒いでも齒が立たないぜ」

「いよえ杉山さん、立ちますよ、今までは兎も角この場合に貴君さへ、夫婦のため何とか仕て下さりやア、きつと何とかありますよ、實は妾、一昨日、やうくの事で聞出して、不意に竹町へ襲ひ込みましたのさ、すると小野さんが不在で、姐さん一人、いつにない妙に濁れて顔色が悪くつて、しよんほりと浮かない状態ですからね、胸に溜めて居た此方の不足もいはず、段々、いろ／＼手を變へて探りましたのよ」

「はてね、たとひ火水の中でも平氣な筈の女が、ふむん、そいつア何か、深い理由があるね」

「ありますよ杉山さん、大變な事があるらしいんですよ、だから妾、急に貴君へ願つて」

「どういふこつたい、全體どういふ理由だい」

「どうつて、姐さんのこつてすから、いくら妾にだつて、善い事なら知らず、自分の思案に餘つた悪いことを、さらけ出して愚痴ッほく泣く女ぢやアないんですがね、あの姐さんが、あゝなるには杉山さん、察して下さい、よほど苦しい事があるんですよ、いふにいはれない辛い事があつて世の中が嫌になつたと現在、その口から聞きましたもの、しかし今更ら

世の中が嫌になれば良人の立たない場合だと、言つた時は杉山さん、一ぱい目に涙が、妾、杉山さん、あの姐さんを、あの勝氣な姐さんを、あゝ泣かしたくないんですよ、助けて下さい杉山さん、世の中が嫌になれば、生きて居ない姐さんです、もし生きて居れば、小野さんのために何か、なさない、身を切るやうな、苦しい辛い事を仕なければならぬやうに、なるらしい場合ですよ、杉山さん、あの小野貞介といふ人は全體、貴君の、お友達で、末の見込があるとか何とか言つて妾の姐さんへ、まさか無理押付にもなさいませぬ、が、兎も角杉山さん、妾、貴君を恨みますよ、かうなれば妾、貴君を遁しませんよ」

あはれ小定、いよく我を忘れて、泣きながら杉山章藏の手首を掴みぬ。

自己が血を分けし肉身の姉でもないに、最初は手を合しながら、たゞ頼りに助けてくれと拜

みし小定、果は我を忘れて身を震はしながら、あの小野さんは貴君のお友達、この妾の姐さんを何うして下さると、聲をあけて恨み泣に泣きし優しさ哀れさ、さらぬも元來が友情に深き杉山章藏、しみく身に徹へて肯首きぬ、

「や、乃公が悪かつた、世間の奴等に對つちやア、あの夫婦の事に付て一點の非も打たれな
いが、小定、汝に對つては杉山章藏、大口あいて理窟をいへないよ、なるほど小野貞介は
乃公の友達で前途に見込があると、請合つた事は無いが確かに言つた覺のある男だ、それ
に、連添ふ小露は汝の姉分で、加之も汝は最初から、あまり嬉しく思は無かつたらしい縁だ、
その小露が小野貞介のため、妻として盡すべき外の事で、いふにいはれない苦惱がありと
すれば、よし、小露に對するよりも寧ろ汝に對して、汝の眞實に感じて、この乃公が小野
貞介を何とか仕よう、たゞ出来ないで済して居れない場合だ、人情といふものは煮て喰ふ

ものか焼いて喰ふものか、その香も知らない當時の藝妓中に、汝のやうな優しい哀れッほ
い女は實に珍らしい、あゝ小露は流石に名物だ、自分は悪縁に引かれて去ったが、あとに
恥かしくない二代目を残してゐるわい」

「杉山さん、さう貴君のやうに仰しやッては妾、二の句が次けませんよ」

「いや、二の句は次けなくッても、立派に二代目は嗣けるよ」

「あら、いつの間にか妾、やられて仕舞ッたよ、うかく、圖に乗ッてさ、全體、かういふ一
本調子の馬鹿ですからね、猶更可哀さうだと思召して姐さんのことを、實は其日、竹町か
ら歸途に和泉橋で小野さんに出逢ッて、思ふ存分、言ッた事があるんですよ、すると小野
さんが、あの急所の知れない平氣な小野さんが、妙な顔をして其まゝ遁出したくらゐです
もの、キツと何か、妾に遁けるだけの事があるんですよ、この初心な小定に言詰められる

小野さんですからね」

杉山章藏、腕を組んで眼を閉ぢしが、やがて目を開くや否、臍ろけながら何をか探り得たる
體、

「どういふ理由か、まだ確と事實の真相は分らないが、談話の工合で大定乃公の頭腦に響い
て來た、こりやア直接、この杉山が四角張ッて出るより寧ろ柔よく剛を制すで、どうだい、
一番、この大役を汝が引受けてくれないか、なアに却ッて汝に限るんだ、乃公は影で糸を
引いて兵糧を送らう、つまりね、明日から朝夕、二時間か三時間ぐらゐづゝ一日も缺かさ
ず竹町へ襲ひ込むんだ、遊びに行くやうな顔をして、實は夫婦の内情を探りながら、なる
べく邪魔をして、なるべく意地わるく、なるべく蒼蠅く附纏ッて、なるべく面の皮を厚く
少しも傍を離れず動かす居坐ッてるんだ、ね、いはゆる敵の懐中へ這入ッて寢込むんだ、

いくら何れでも其うちには夫婦の根氣が盡きて、きつと本音を吐くよ、自然と吐くやうになるよ、吐けば直ぐに乃公が出かけて、今度といふ今度こそ、ぐうの音も出させない覺悟だ、無論、それに付て費す汝の身體は、乃公が買ツてるぜ、どんな事があつても心配なく、づうくしく、やつて来てくれ」

この一途の小定に、この一途の杉山が糸を引いて、そろく竹町の隠れ家を搦み倒さんとの勢ひなり、

人しれず杉山章藏と心を合せし小定、その翌日の朝、すぐに俵を飛して手土産を提げながら竹町へ押掛けぬ、

「姐さん、また來ましたよ」

流石の小露も氣を許して、かくまで深い底のある事とは知らず、加之も今日は片頬に例の笑靨を浮かべながら、さのみ打濁れもせぬ風情、

「おや、定ちやん、よくね」

「姐さん、來かけると妾、二日も堪忍が出来ないんですよ」

「ほよよと相變らず一途な奴だね、來るも宜いが、出てる間は出てるやうに、家業を粗漏に仕ちやア不可よ、櫻は三日、今が肝心の稼ぎ時だからね」

「有難う、そりやア充分、承知して居ますがね、何だか氣にかゝるんですもの、過日、あゝいふ談話を聞いて猶更」

「なアに、ありやア定ちやん、あの時ツきりさ、もう鶴龜、あんな延喜でもない、いやな事は二度と再び聞かせないからね、何故あの時、あゝ鬱いだらうか、あとで自分ながら、馬

鹿々々しかつたよ、ほよよとあら、こんな菓子を持って来ては困るにさ」

「だって、外に何も、わざわざ提げて来るものがないんですもの、姐さんの好きなよ、その代り妾、今日は晝御飯を戴きますッ」

「久しぶりだねエ、何か、お好みよ」

「しかし小野、あの旦那様は」

「ほよよとんだ旦那様で困るよ、今日は在宿だがね、まだあの通り、前夜のまんまさ、まるで石佛だねエ」

「妾、起してあげよう」

「およし、うるさいよ、のこ／＼起きて来て、また例の調子で、つまらない馬鹿口を聞かれると厄介だから」

「實は姐さん、妾、仕かけた話があるんですよ、過日の續談で」

「仕かけた談話、良人に」

「おや、姐さんに何とも、仰しやらないの、過日こゝから妾が歸途に、和泉橋で逢って、近所の料理屋で、さうですねエ二時間も談したでせう」

「あら、さう、少しも口へ出さないの、おまけに其夜は取別け平生よりも遅くまでいろ／＼と」

「ほよよと御自分の勝手が少々、わるかつたからですよ」

「全體、どんな談話なの、二時間も」

「姐さん、實はね」

狸寝入の小野貞介、もはや堪らぬ奥の室より障子越の大聲、

「かう露現した以上は只今それへ本人が罷り出て白狀するよ、今日こそ晝時分まで、ゆつくり寝込まうと思つたに、朝ツぱらから、とんでもない女が来たわい、道理で前夜は變な夢を見た、この前兆だつたね」

和泉橋の一件、いよく露現せし小野貞介流石に其まゝ寝ても居られず、そろく夜具の中より這出せば、障子越に小露と小定の聲、

「おや、動き出したらしいよ、いくら狸でも、かうなれば化けて居られないもんと見えるね
エ定ちゃん」

「妾、わるい事を言ひましたね、折角、秘して居らした事を素ツば抜いて」

「そりや、どうせ知れるこつたよ」

「そりやア、さうですね、わざく何も姐さんには、お秘しなさる理由がないんですから、いづれ談話のあつた事と思つて妾、うツかり」

「まア兎も角、今に起きて來るから、どんな顔を出すか、よく御覽よ」

小野貞介、藻屑を纏ひし泥龜の如く、夜着を背に持上げたるまゝ這出して隔ての障子、そろりと引開けながら、ぬツと寢恍面を差出しぬ、

「二人とも勢ひに乗じて、すきな事を饒舌るね、さア見てくれ、どんな顔でもない相變らず
こんな顔だ、但し面を洗つて出直せといへば幸ひ、ついでに洗つて來るよ」

小定と差對うて長火鉢を夾みし小露、ちらと横目に振り返りながら、さて口惜しげに冷かなる微笑を浮べぬ、

「定ちゃん、あれだよ、珍らしくもないが、あよいふ人だよ、小兒なら腹も立たないが、あ

れで以て、こよまで苦勞して來た妾にも、まだ氣を許さない、水ツ臭い、さうかと思へば怖ろしいツ量見のある良人なんだよ」

小定、こよぞと思ひながら、わざと今更氣の毒けの顔色、

「あら、姐さん、そんな事を、いくら何でも、さう一途に、いふもンぢやありませんよ、第一、かうして妾の來るのも別段、外に用のある理由ぢやアなし、實は睦まじい交情の好い、羨ましい、ところを見たくッてお邪魔に出るンですからねエ、どうか貴君も、この姐さんに、こんな事をいへせないやう、お願い申したう御座いますワ、また妾だから構ひませんが、もし外の女に、随分、顔を廣くして來た姐さんですから、いろンな陰口をいふ女があるンですよ、お氣に觸るか知れませんが、あの小野さんに、何故あゝ苦勞するだらう、あれで末が遂げるだらうかなんて、をりく、妾の耳へ這入るンですもの、また姐さんも、よ

く無かつた事よ、同じ苦勞するにしても、柳橋の名物に唱はれた身が、金鑿賣にまで、だから猶更、名高く風聞に立てられるンですよ、さうで無くツても、いや行方が知れないとか、烟になつて仕舞つたとか、どこへ逃げたとか隠れたとか、つまらない事をいふ奴があるンですよ、ア口惜しいツ、何故また小泉町を引ッ越して以來、今までの馴染へ顔も影も出して下さらないの、それが妾、ふしぎですワ、全體、どういふ理由ですの」

「おや、定ちやん、あの良人にかと思へば妾にまで不足の箭を射向けるンだねエ、ちと方角が違つたやうだよ」

「妾、違はない覺悟、きツと姐さんにも何か、人に顔を出しては都合の悪い理由があるンでしょう、是非その理由を聞きたい事ね」

「なアに、そんな理由も何も」

「ぢやア今日、これから妾と同伴に、久しぶりで、柳橋の方へ出て下さいな、いろんな事を言ッた人の手前もあるンですからねエ」

小野貞介、ごそくと元の寢床へ這込みながら獨言、

「あゝ舊阿蒙にあらず、いつの間に修行したか、定公め、なか／＼油断のならない女になツたわい」

小露の顔色といひ、小定の口氣といひ、互に相組んで、いよく形勢不穩の狀ありと見て取りし小野貞介、其まよ元の寢床へ通込みしが、そつと後退りの四這に逆戻りの體、ますます泥龜の如し、

「定ちやん、どうだい、察しておくれ、萬事これだから手も付けられないよ、箸にも棒にも

掛らない良人だよ、おまけに焼いても煮ても食ない良人」

「ほよよと姐さん、ふざけて居なさるンですよ、いくら何でも、まさか本氣で、あんな眞似が」

「なアに本氣さ、本氣で、これだから、眞實、腹が立ッて自烈ツたくて、堪らないんだよ」

「おや、本氣ですの、あら、酷い事、あんまりですねエ」

「それも月に一度か二度の洒落にすることなら、また面白いか呵しいとか、舊の苦勞を忘れる種にもなるがね、のべつ幕なしだから、いかな妾も匙を投げるよ、どんな敵手にも手を置いた事のない梗枯屋小露だツたがねエ」

「また憎まれ口を氣くやうですが、さう氣短かく匙を投けないで、いつそ姐さんかういふ時に根よく執念深く、どこまでも追ッかけて、ぎゆう／＼いはして、お上げなさいよ、昔と

ツた杵柄で、眞正面からね」

小野貞介、顔は出さねど、むくく夜具を持上げて吹きぬ、

「こら定公、年齢も行かないくせに生意氣な、よけいな事をいふない、覺えて居ろ、自分だ
ツて今に乃公のやうな男を持つて困る事があるぞ」

「ほよよよ姐さん、どうしましやう、小野さんと同じやうな男を持つて妾も困りますとさ、
しかし御自分でも、よくく乃公は困る男だと承知して居なさるだけが、優しい事ね」

「やい、控へろ、つべこべと、よく饒舌るやうになつたな、大體が無口な内氣の性質で、
さういう女ぢやア無かつたに、過日、和泉橋で不意に出逢つた時といひ今日といひ、頻りに乃公へ向つて来る工合、はア何か恨意があるんだね、それとも、また、乃公のこつた
から、どツかの女に頼まれて、この睦まじい夫婦の交情を割た上、内々その女の方へ取持

たうといふ量見かね、そいつア不可、考へて見る、現在、自分の世話になつた姐さんが金
鑄賣まで仕て添つた大事の御亭主ぢやアないか、おい、うかく其女のいふ事を聞けない
ぜ、どうも汝と乃公の交情を割きに来た敵の間者らしいよ、油断のならない浮世だなア」
流石の小露も小定も互ひに顔を見合しながら、ブツと思はず一時に吹出しぬ、

「ほよよよまア姐さん、どうでしやう、呆れた事、どツか外の女に頼まれて来た間者だらう
とさ、この妾が、ほよよよしかし姐さん、いくら戯談にも寢言にも程度のあるもんで、こと
まで思ひ切つて馬鹿々々しく、ことまで圖場ぬけて、づうくしく平氣に言へる方は、や
はりの男として豪い方なんですよ、凡そ世の中に二人とはありますまいよ、その證據には姐
さんも妾も眞面目に怒つて居れないぢアありませんか、いつの間にか笑はされて仕舞まし
たもの、ほよよよ」

小露も今更ら怒れず笑はれず、其まゝ起て厠へ行けば、小野貞介、そろりと夜具の中より首を持ち上げぬ、

「おい、定ちやん、乃公に悪い事がありやア眞面目に聞く時もあるからね、どうか今日だけは許してくれ」

同じ胎内より出でし兄弟でもないに、ふしぎや幾度か捨てむとして捨てても得やらす忘れんとして忘れも得せず、今なほ小野貞介のために人知れぬ心を運ぶ杉山章藏、

また血を分けし眞實の姉でもないに、我身の事よりは猶更小露の身を思ふて、あるにもあらぬ果は恨み泣の小定、

杉山は貞介のため、小定は小露のため、互に運ぶ情は違へど、つまりは同じ夫婦のために心を砕いて、いはゞ浮世の横道へ持込みし秘密の函の蓋を押開けんとの一念、内外相應じて、頻に隙を窺ひぬ、

加之も杉山章藏が後盾となりて、心配するな餘所の座敷へ出るには及ばぬ、乃公が買占めたといふ勢ひ、さらぬも平生の内氣に似合ぬ眞一文字の小定嬉し涙と口惜涙と掻交せて押寄せぬ、

今日も早朝より俵を飛して、下谷の竹町へ駈込めば、今しも門を出でしばかりの小野貞介、其まゝ立停りて眉を顰めながら、舌鼓もろとも一種異様の目を欬てぬ、

「また、やツて来たな」

小定、俵より靜に降りて、わざと笑顔を作りながら差寄りぬ、

「また、やツて来ましたよ、嗚お蒼蠅いでしやうね」

「全體、何の用があるンだい」

「ちよいと、姐さん」

「今日で三日つゞけて来るが、さう毎日毎日根氣よく来る筈アない、素人と違つて朝ツばらから、第一、ちよいと姐さんちやアないぜ、来ると一日いやに、落着て平駄り込でる工合、どうも變だ、きつと穩ならン用があるンだらう」

「ほよよ宜いぢやアありませんか、妾の身體を妾の勝手で、逢ひたい姐さんに逢ひに来るンですから」

「宜いさ、宜いがね、つまらない餘計な事を饒舌ツて、をかしく妙に小露の氣を悪くしてくれちやア困るよ、さらぬだに御機嫌の斜になつてる折柄だから、危険でならない、わけて一昨日の朝なンかア、まるで不意討だ、わざ／＼乃公の寢首を搔きに來たやうなもんだ

ぜ、はよよよ」

「お氣の毒さま」

「入らざる他の事より今が自分の身に取て色香の眞ッ最中、大切の花時だ嵐の吹かないうち全盛に咲誇るべしだよ、お座敷の忙しい身體だらう」

「おや、御親切に、有難う、お世辭も厚く受けますワ、ほよよよ」

「や、此女、此ごろいやに摺れて來たな、誰に仕込まれた、もし變な御師匠様が出来たンぢやアないか」

「退て下さいよウ、富樫のやうに貴君、さう門口に立ツて關守をするにも當らないぢやアありませんか、いくら何と仰しやツても妾、おめ／＼と此ま／＼引ツ返しませんよ、また貴君も今、どツかへ、お出かけなンでしやう、もし御約束があれば時間が後れますよ」

「乃公の事に構ふない、今日は出ても出なくツても宜い用だ、おい、おいおい伸を返すには及ばないだらう、待たして置けよ、吝臭い、ちよいと来た用に藝妓らしくもない」

「ほよよ、伸を返しても返さなくツても貴君こそ妾に構はず、うツちやつて置いて下さいよ、今日は夜分まで、ゆつくりとお邪魔する心算で来ましたからね、事に依ると泊り込みますよ、ほよよ」

元來の心は優しく生れて加之も藝妓稼業には不似合の内氣もの、外に何の顧慮あるべき女ならねど、たゞ一途に小露を思ふの餘り、果は我を恨んで口惜しまぎれに如何なる事を言出すやら知れぬ女、まして和泉橋以來の今日この頃、三日も續けて訪ひ来るには仔細なくて叶はぬ筈、こいつ油断大敵うかく高を括つて甘く見られぬ女と、流石の小野貞介も實は人知れ

ぬ心の底に疚しき折柄、猶更其まよ動き兼ねて自己が門前に只一人、おもはず腕を組めば、はや家内に入りし小定、そツと立戻りて扉の隙間より差覗きぬ、

「おや、まだ貴君、そこに」

小野貞介、平生にない事、はツと我ながら驚いて振返りしが、わざと平氣の體、

「ふざけるな、ちよいと考へてるんだ、行かうか、行くまいかと思つて」

「どツか存じませんが、折角、さう洋眼まで召したんですからねエ」

「黙ツとれ、餘計なお世話だ」

「だツて、氣になりますよ、突出された繼ツ子のやうに貴君、扉の閉ツた門口でさ、ほよよほそれぢやよ妾も何だか變な工合で、此ま、家内へ心持よく這入りきれませんよ」

「うるさい女だな」

「いくら蒼蠅くツても貴君、そこに立ッて居らッしやる間は妾も、こゝを動きませんよ、遠くもないから、どうせ聞えて居ませうが、姐さんは奥、妾は門内、貴君は門外、それぐ三方で妙な事になりましたねエ、ほよよ」

「勝手にしろッ」

小野貞介、舌鼓もろともステツキの尖端に門前の敷石を叩いて、其まゝ急ぎ足に靴音高く立去りしが、凡そ二町あまり行過ぎし後、また思はず俄かに立停りながら、小首を傾けて振り返りぬ、

此ごろの小露に小定は、どの道より考へても大の禁物、まして血を分けし姉妹よりも睦まじく打解けて親しい關係、目下の我ためには滔々たる雄辯家の説客よりも恐ろしい敵なりと、俄かに踵を返して立戻りつゝ門の扉を引開けんとすれば、固く閉じて鍵を懸けたり、

や、畜生、いよく我を甜めし業と、聊か癩癩まぎれの拳に扉を叩けば、開けに来るもの飯炊婆と思ひの外、

「あの、貴君、もう御歸宅、早い事ね、どこまで御用を足しに往らしたの」

「また定公かい」

「は、妾ですよ」

「妾でもないもんだ此女め、開けろ、自己が家だぞ」

「ほよよわかッて居ますよ、しかし姐さんが、さう言ひましたよ、誰が來ても用を聞てから開けた方が宜いと」

「やいく、やい、圖に乗ッて、ふざけ過ぎると眞實、きかないぞ」

「妾、實は貴君より、姐さんを大切に思ッてるんですよ」

「その姐さんの御亭主だい」

「おや、忘れて居ました事、さうでしたね、失禮、今、すぐ開けますワ」

心に疚しければ智者も迷ふの道理、いかなる剛敵にも仕てやられぬ筈の男ながら、わづか一疋の小女郎に自由自在、咬へて振られし状態となりぬ、

世に處する大膽さ、事に當る不敵さ、平生は鐵壁も蹴破るほどの小野貞介ながら、わづかに借屋建築の門扉一枚を盾として小定の擒縦自在に扱はれやうく家内に入れば、また小露のために眞向の一太刀、びしやりと浴せられぬ、

「どうしたんですよ、吸寄せられたり閉出されたり、流石の良人も酷く器量が下りましたねエ、その様子では妾も何だか心細くツて、今までのやうな力には仕て居られませんワ、行

末が案じられてさ、ほよよよ」

洋服のまよ二人の中間に割込んで、わざと天井を仰ぎながらの高笑、

「はッはよよよ横綱を張る大關も路傍の小石に躓く道理で、あまり段の違つた相手には却て遣られるよ、何事も世の中ア互角か、もしくは、それ以上の敵でないと面白くない、第一また小定め、いやに此ごろは場馴れて来て、ふざけ過ぎるぜ、よほど調子が狂つてゐるわい、きつと何か人の知らない蔭から小定を狂はせる奴が出来たに相違ない、どうも變だ、つらつら事の前後を考へるに由來と違つて乃公へ對する工合が急に馬力を加へて來たからなア、はよよよ」

笑ひながら、じろりと横目に睨みし眼球の鋭さ、小定、はッと思はず狼狽て顔を反けしが、また俄に氣を取直して、さあらめ體に莞爾みぬ、

「姐さん、妾に此ごろ何か、調子を狂はせる奴が出来ましたとき、嬉しい事ね、藝妓の身に取つては自然の貫目ですよ、年齢の割に小兒だといはれて居た乳臭い妾も、いつの間にか段々、さう見られるやうになつたんですねエ、ほよよとどうか、その狂はせる奴が生優しい尋常の色男でなく、小野さんのやうな底も蓋も確固した方で、あれば結構ですがねエ、ほよよと」

小露も思はず笑ひながら、ちよいと首を前に突出して、わざと小野貞介を振り返りぬ、

「春畫草紙の殿様めいた、色男も好かないが、またこの旦那様のやうに定ちやん、お粗末すぎた顔面でも感心しないからねエ、ほよよとおまけに萬事が底も蓋もあり過ぎてさ、釘付けだから中に何があるか、知れたもんぢやアない、たゞ自分の勝手な事だけは秘さず、よく打明けて下さる旦那様だよ」

小野貞介、無言のまゝ座を起て、隔ての障子を引開けながら、隣室へ飛込みつゝ洋服を脱がんとする體に、たのまれねど流石に小定、また續いて追ひ入りぬ、

「口は悪くツても心は優しいでしょう、妾が手傳つてあげますよ、お召しもの、常着ですか」

「よけいな事するな」

小定、俄かの大聲、

「あら姐さん、怖い目で妾を、ぎゆうと眺んでよ」

小野貞介、まずく持餘して手を振れば、また忽ち大聲、

「姐さん、今のは取消ですとさ、おや、また眺み直しですワ」

情婦でも義理でもない小定に呼出されて、とるものも取敢ず馳せ来る男ならねど、ふしぎに捨て難く忘れ難き小野貞介のため、わざ／＼俾を飛しての杉山章藏、人目には何と見られるやら、内々そつと例の料理屋の奥の一室を閉切りぬ、

「どうだい、其の後、少しは緒を曳出したかね」

小定も思はず膝を進めて、小露のために我身を忘れながら、今日この頃は親か兄かに出逢ひし心地、

「まだ確實に、いよく／＼かうといふ底は探れませんがね、貴君、六日も續けて根氣よく、づう／＼しく、毎日々々朝から押掛けましたよ、無論、貴君が背後に付て居て下さる心丈夫もありますが、實のところ半分は自棄でね、ほよよ」

「で、流石の小野も随分、まるつたらう閉口したらう、はよよ」

「だが杉山さん、やはり妾、あの小野さんは、豪い方だと思ひますワ」

「そりやア、さうさ、世間普通、尋常の男でないよ、ないから猶更ら、惜しくもあり、また危険でならないんだ、しかし目下の生活向は、どのくらゐの程度だ、どんな家だ、どういふ工合に夫婦で、やツてるね」

「小泉町に居た時と違つて、どことなく萬事が贅澤ですよ、使ツてる者はお飯を炊く耳の遠い婆さん一人ですが、その割合に家も廣くツて立派だし、小野さんも此ごろは一切洋服でね、思ツたよりは案外、氣樂な生活ですよ、いはゞ外へ知れなくツて内が、ゆツたりと仕て居るらしいんですよ、もし正當ならば、實に羨ましい世界ですわ」

「ふむン、ぢやア何か小野の、やツてる事があるかね」

「そこですよ杉山さん、妾、ふしぎに思ツてますの、そりやア姐さんが最初から少しは持ツ

「て居ましたがね、第一、あの全盛に稼いで居た時の身の調度を賣ッて仕舞ッたり、また例の金罽でもね、ある事は、ある筈ですが、さう貴君、大した安心するほどの事は迎も出来ませんよ、しかし見たところは何の心配なく五年も十年も夫婦ながら遊んで居し、平氣に暮せるやうな調子なんですよ」

「はてね、聊か變だな」

「眞實、變ですよ、それで姐さんが、どんな場合にも泣いた事のない姐さんが、をり／＼脆く涙ぐんで、いふにはれない苦しい事があるらしいんですから、猶更ら妾、變に考へますのよ、と言ッて、また姐さんが、その事に付ては、どういふもシか、少しも妾に聞かせないんですよ、いくら手を變へ品を換へても、たゞ自分で自分の胸を、苦しうに押へるばかりでね、つまり何か夫婦の間にあるんですよ、それも姐さんの方からでなく、キツと小

野さんの方から無理往生に押付けた註文で、否も應も退ツ引ならない理由らしいんですからねエ杉山さん、小野さんを豪い方だといふのも實は妾、あの姐さんを、あれまで苦勞させた上に今また泣かして置きながら、その姐さんに少しも口へ出させないくらゐですものあまり豪過ぎて、恐ろしくツて、憎いんですよ、口惜しいんですよ杉山さん」

杉山章藏、ますく腕を組で眉を擧めながら、何物にか壓せらるゝが如く目を閉ぢて羞俯きぬ、

杉山章藏、やうく組みし腕を解き擧めし眉を開いて、小定の顔を打守りながら、膝を進めぬ、
「なるほど、さう聞いて見ると、いかにも小野の方から何か非常な、無理註文をしたらしい

ね、加之も打明けて押付けられた以上、あの小露の氣性として、今更小野を捨てよ出る理由にも行かず、また他人にもいへずたゞ自分の胸に苦しんで煩悶してららしいんだね」

「さうですよ、きつと杉山さん、さうですよ、だから妾、考へれば考へるほど猶更口惜しくツて、姐さんが可愛さうで残念で堪りませんよ」

「まア待て、直接この乃公に恨みがましく向つて來ても困るよ、ところで此頃の小野が小露に對する工合、すべての調子どういふ鹽梅だね」

「どうツて別段、相變らずですがね、つまり小野さんに、さういふ無理な酷い註文のある故か、どこことなく差控へて、なるべく姐さんの氣に觸らないやう、遠慮氣味に見えますよ、現在、この妾にだつて何といはれても今までのやうぢやアありませんもの、それが何より小野さんの弱い急所のある證據ですよ、正當で、あの小野さんが、あゝなツて居れる方

すか、もし妾等風情が生意氣な事でもいへば、すぐ鼻息で吹飛される筈ですからねエ、ほぼよ」

「なるほど」

「また貴君、なるほどくでは、困りますよ、やるだけ、やツて見て、妾の手に終へない時は出て下さる約束でしやう、もう貴君、出て戴く時ですよ」

「や、出るがね、も少し、やツて見てくれ、まだ乃公は早いやうだ、わづか六日ぐらゐぢやア不可、せめて半月も政寄せた後さ、其うちには必ず秘密の底が分るよ、いくら氣性の勝ツた、堪忍の強い小露だツて實女だからね、第一あの小露が目に涙を持つほどの、さう苦しい事を、いつまで自分一人の胸裡に深く疊み込で置ける筈アないよ」

「そりやア、さうですがね杉山さん、これが只、面白、をかしく遊びに行くと違ツて、なか

なか辛いもんですよ、用もないに毎日々々、朝から、あの素早い小野さんですもの、きつと今は氣取られますよ、現に妾へ、をりく、針を刺すやうな痛い言葉がありますからねエ、また姐さんだつて、尋常の女ぢやアないんですもの、いよく其場合になれば、急に小野さんの無理註文を身に引受けて、思ひ切つた事を遣るかも知れない女ですよ、だから是非とも、あとの祭禮にならない今のうち貴君に出て戴いた方が妾ねエ、杉山さん」

「いや、その邊もあるがね、こと三日、もう三日、汝が押寄せてくれ、いッそ明日から七日ぐらゐる通はずに居坐つてくれないか、ずつと泊り込で」

小定、暫し無言のまゝ差俯きしが、俄に顔を振上げぬ、

「よう御座います、かうなれば、どうせ同じこつてすから、第一は姐さんのためですすから妾、七日の間、宿泊がけて居坐りましやう、その代り杉山さん、七日の後は貴君、出て下さる

ンです、ね、失禮ですが、念を押して置きますよ」

「出る、いよく出るぜ」

「只だ顔ばかり、出して下さるンぢやア御座いますまいね」

「なかく手厳しい談判だな、よし、乃公が出た以上、出たどけの事を仕て見せよう」

こよ一週間の後には、是が非でも杉山章藏が出るといふ、加之も出れば必ず出たどけの事をするといふ約束に、小定いよく氣を得て、またもや乗出しぬ、

さらぬも六日つゞけて押掛けられし勢ひに流石の小野貞介、おもはず眉を擧めながら人知れず心に不審の折柄、また不意に襲ひ込まれて、ますく驚きぬ、

「や、また来たな」

「姐さんは」

「姐さんぢやアないぞ此女、全體、どういふ何の用があつて、閑散な身體でもないに、さう毎日々々押掛けて來るんだ、何か理由があらう、白狀しろ」

「宜いぢやアありませんか、妾の身體でといへば、此方が迷惑だと仰しやるでしやうが、そこは姐さんと妾の間柄、その姐さんの貴君が何も、さう怖い顔なさらしないで、よからうかと思ひますワ、姐さんお二階ですか」

「おい、おい、こら待て、まア火鉢の前へ坐れよ、いちく、此ごろア乃公を目の敵にするんだな」

「お談話は後で承りましょう、兎も角も姐さんに」

「不在だ、今日は居ないよ」

「おや、お不在、どいへ」

「どツか知らない」

「まア意地の悪い、貴君の知らない筈がありますかね」

「いや、眞實、知らないんだ、起きると今朝、すぐに出て往つたよ」

「どことも貴君に、いはないで」

「いはない、また聞きも仕ないさ」

「ふしぎですねエ」

「何、ふしぎな事があるもんか、生物だよ、いくら大切に仕舞つて置いてもね、生物だから飛出すよ」

「あら、過日の復仇ですね」

「馬鹿いへ、此くらゐで復仇の帳消になるもんか、さア今日こそ幸ひ不在中に乃公の方から一番、ぎゆうぐいはしてやるんだ、覺悟しろ」

「まア姐さんの歸るまで、おとなしく尋常に討たれてあげましようかね」

「さよさういふ太い量見で居るんだな、顔にも似合はない女になつたぜ、道理で、いつも小露の居る時、わざと乃公に對つて、いろんな都合の悪い事ばかり、ほじくり出すよ」

「貴君また何故、姐さんの前で都合の悪い事ばかりあるんですよ、どんな人だつて皆、世間の手前で他人にこそ、都合の悪い場合もありましようが、生涯うち解けた夫婦の間で、さう都合の悪い事はない筈ですがねエ、もし、あれば貴君、何か姐さんに濟まない事を仕て居らつしやるんでしやう、失禮ながら貴君の事でも、他に女沙汰の心配は無いとしてきつと何か、姐さんに酷い事をなすつてるんでしやう、さア今度は妾が攻撃軍ですよ、ま

ツ直に白状なさい」

油断大敵、いつも不意の槍玉にかけられて小野貞介、ぐつと詰りぬ、

心の底に覺悟さへあれば、いかなる場合にも慌てず狼狽へず、敵の弱身にさへ付け込めば、萬事これほど強いものなし、

流石の小野貞介も、今日また小定のために組敷かれし形状、苦しげに面を皺めて聲なく笑ひぬ、

「女といふもの、平生は宜いが、さて妙に曲り出すと水飴を手に攪んだやうで、ねばりと蒼蠅く始末に終へない厄介物だね」

「ほよよと世の中は遁けるにも、いろんな文句のあるもんです事」

「遁ける、誰が遁けた」

「貴君ですよ、現在、妾が今、言ッた事に付いて少しも返答らしい返答をなさらないもの、卑怯ですよ」

「はよよよ、小野貞介も今年二十二の女に遁けるの、卑怯だの言はれりやア澤山だ、ありがたい」

「あら、それが貴君、遁け上手といふんですよ、しかし今こゝで貴君と喧嘩しても仕方がありませんから、姐さんの歸るまで、いッそ氣を變て何か面白い世間談話でも致しましやうか」

「どうでも勝手に饒舌るべしだが、今日は小露、遅くなるかも知れないぜ、久しぶりで粧飾込んで出たからね」

「お粧飾を仕て、おや、さうですか、何處へでしやう、と言ッて貴君に尋ねても知らないよ仰しやれば仕方なし、しかし姐さんが、あの容色で丸髷に結ッて、好みの衣裳を着飾ッて、例の通り少し反身になッて、りうと立ッた風姿は恐らく、外にありますまいね、意氣で恰當で上品といふのは眞實、姐さんの事ですよ、お氣に觸るかも知れませんが小野さん、ただ見た目の女振だけでも貴君には、よほど飛放れた過ぎもんですよ、おまけに持つて生れた氣性が、花も實もあつて、あれだもの、どう考へても、惜しい事ねエ、勿體ない事ねエ」

「此女め、黙ッて居りやア圖に乗ッて、すきな事を吐すよ、惜しいとか、勿體ないとか、愛嬌のない女だぜ、もし物の言様があつたもんだ」

「だッて妾、お世辭は大きらひ」

「ますく人を馬鹿にする」

「ほよよと貴君が人のため、馬鹿にしられるやうな氣の好い方ですかね」

「おい、戯談は置いて、もし用がありやア明日また来るが宜い、眞實、今日は遅いぜ、夜に入るかも知れないぜ」

「安心して下さい、妾、實はね、宿泊り込の覺悟で來ましたの、今夜だけぢやアないんです

よ、落着て、ゆつくと、此まよ半月ばかり」

小野貞介、あつと呆れぬ、

「おい、こら」

「おいでも、こらでも、なか／＼急に動きませんよ、ほよよ」

どうしても動かす歸らず、其まよ宿泊り込みし小定は階下に奥の一室、二階の一室には小野

貞介と小露の夫婦、はや夜の十一時を過ぎぬ、

「おい、困ったぜ、階下の小定には、よほど妙だよ此ごろア、どういふ理由か知らないが、

毎日々々」

小露、寢ながら軽く枕を變て、わざと顔を反けぬ、

「どうしたんでせう」

「まさか、そんな事もあるまいが、もし汝何か談話の端に、ちよいと口を這つて洩したんぢやないかね」

「何、良人、いくら定ちやんにだつて、馬鹿々々しい、あんな事が自分の口から洩せるもんですか」

「だつて、あまり變だよ、加之も小定、一人の藝でないらしいわい、小定の藝としては、あ

「まり根強く思ひ切ッて大膽すぎる點があるからね、不思議でならないよ、汝、どう考へる」
「さうですネエ、別に何といふ考へも付きませんが、つまり斯うでしやう、どうしたッて此ごろの妾ですもの、いづれ今までのやうぢやアありませんよ、つい氣が沈んで、面白くないから自然、顔色も悪し、をかしい談話を聞いても、をかしいやうに見えないのが、たゞ一途に妾を思ッてくれる小定の性分として、猶更變に怪しく考へるんでしやう」

「いや、その點ばかりでないね」

「ないとすれば、それから、それへと段々いろく、氣を廻して見て、もし良人が何か、妾に邪慳な事でも仕ても居ないかと、いふぐらゐの程度でしやうよ、しかし此方の身に取ッては、まるで中らないに仕ろ、少しやア中りかけた理由になりますからねエ」

「や、さう、いはれて見ると、一句もないがね、實際、汝、例の事を洩らしたんぢやないん

だね」

「まア良人も疑ひ深い、よく思ッて御覽なさい、今更末練らしく人に洩すぐらゐるなら、黙ッて此まゝ遁出しますよ、また妾の流を振廻すやうですが、遁け場處のない身ではなし、何の心配もなく只その日を無事に過して行くだけの事なら何處でも氣安く暢氣に暮しますからねエ、ほよよ、その妾が、遁けもせず離れもせず、何の因果か、かうして良人の傍に居るんですもの、たとひ身を切るやうに辛くツても、泣きながら得心して居ますよ、どうせ最初から良人に殺されてるんですもの、いはど悪縁の狙に上せられた魚さね、もし愚痴をいへば、同じ承知で苦勞するなら外の事で、したかつたと思ッてるだけですよ」

「すまない」

「良人に謝ッて下さいといふんぢやアありませんがね、まア斯うですよ」

「そりやア、それにして、小定を汝、どうする、あの様子ぢやア、なかく急に動かないぜ、第一、無價でない今あの身體を、わざく遊びに来る筈もなしね、ますく變だ、加之も半月ばかり宿泊り込むといふ勢ひには驚いたよ」

言葉と共に小野貞介、夜具の中より龜の子の如く首を擡けて、寝ながら顔を反けし小露を差覗きぬ、

「おい、おい」

「何ですよ」

「あすの朝、汝、だしぬけに、問うて見ろ、定ちやん此ごろ彼、杉山さんに逢った事がある

かと、ね」

小野貞介、そろく本氣の沙汰に眉を擧めて考へ出しぬ、

いつも朝寢の小野貞介、今朝にかぎりての早起、朝飯の箸も取らず、顔を洗ふや否、すぐに洋服を着込で、いづこへか立出づる體なり、

されど其まゝ黙つて無事には出ぬ奴、前夜より宿り込の小定が枕頭へ立つて、わざと俄かの大聲、

「お早う」

不意を打たれし小定、はつと驚いて、思はず枕を上げんとすれば、小野貞介、仁王立のまゝ微笑を含みぬ、

「お客様だ、お客様といふものア火事と地震の外、さう慌てよ起るに及ばないよ、ゆるく正午まで寝てるが宜い、はよよしかし君の寝顔を始めて見たが、なかく美しいね、ど

うも寝女に出来てるよ、起きて居て小理窟をいふ時とは大變な相違だ、まるで別物のやうだ、よほど女振が上だぜ、以後その覺悟で人に對つちやア黙ツて寝てるに限るよ、ひよこひよこ起出して餘計な事を饒舌るもんでないさ、はよよよ」

此ごろの小定、かうなれば意地として、搥けし枕に再び首を置直しぬ、

「おや、さう妾、寝女に出来て居ますかねエ、ちやア此まよでも貴君へは失禮になりませぬ、實は今まで少しも存じませんでしたよ、まだ寢て居て鏡を見た事が御座いませんからほよよよ」

「鏡を見なくつても寫眞に撮らして、後で見りやア自分の寢顔がわかるさ、饒舌る事ア多いが割合に智慧の妙い女だなア、しかし黙ツて寝ると女が美くなるばかりでない、自然と智慧もありさうに見えるからね、おとなしく其まよ横になつてさへ居りやア、實に天下の

逸品、才色兩全の名妓だぜ、はよよよどりやア、そろく出かけようか」

「お見送り申すんですが、起きちやア、いけない妾ですからね」

「はよよよまだ何とか言ッて、乃公に勝たいたんだな、ところが、お生憎さま、もう無効だぞ、ちよいと前夜、急に考へた事があつて用心してるからね、この男が考へて用心した以上、芋殻で鐵壁を突くやうなものだ」

折しも二階より小露が降りて来る足音に、小野貞介、小兒の如く驚いて其まよ遁出さんとするズボンの端を、小定こよぞと寝ながら手を伸して不意に掴みぬ、

「まア貴君、さう急がなくなつても」

「おい、おい放せ、放せよ」

「放しません、無理に貴君お放しなさると妾の顔が足で蹴られますよ」

「蹴らないから放せ、ね、そつと放せば蹴らないよ」

「いやです、此まゝ何處へでも引摺ッて往ッて下さい」

「ふざけるな、畜生」

「あら姐さん早く来て下さいよ、今この足で顔を蹴られますからさア」

入らざる事に仁王立の小野貞介、うかく油断して、また小定に喰ひ付かれぬ、

放せ、放さぬ、顔を蹴られるといふ聲に、今しも二階を降來りし小露、慌て差覗けば、夜具の中より襦衣姿のまゝ半身を引摺出されし小定が一生懸命にズボンの端を掴み、掴まれし小野貞介は片手を襖にかけて宙を泳ぎながら遁出さんとする體、流石の小露も呆れて吹出しぬ、

「あら、まア、どうだらう、いくら巫山戯るに仕ても、あんまり馬鹿けて物が言はれないよ、どこで習ッて來た藝か知らないが良人、そりやア何の真似です、また定ちやんも定ちやんだよ、それで盛り藝妓の若手と見られるかね」

小定、まだ執念深く手を放さず、

「だッて姐さん妾の寝てる枕頭へ來て、いろんな悪まれ口を」

小野貞介、振返りながら面を皺めて苦笑、

「嘘を吐け此女、お早うと挨拶しに來たンぢやアないか」

「わざく、妾に挨拶して下さる方ですかね、顔を蹴られないのが僥倖ですよ、貴君こそ嘘吐だッ」

「や、けしからん事を吐すぞ」

小露、わざと手も出さず其まゝの見物、

「さア、どうなるか二人の結果を付けて御覽、さう善い事を仕て来た覚えは無いが、妾も幸福で、この上もない結構な御亭主と妹分を持つたよ、ほよよ」

「おい／＼見物せずは何とかしてくれ、前夜、言ツた通り今朝ア急ぐんだよ、兎も角も此女の手を放してくれ」

「姐さん、それほど急ぐ用があつても、わざ／＼出がけに妾を窘めたいといふ方ですよ、どツちが悪いか考へて下さい」

小露、ます／＼呆れ返りぬ、

「もし双方これが世間普通の出来さうな男と女だツたら、それこそ大變だよ、いつも朝寢の御亭主が珍らしく今朝は妾を二階に置去にしてさ、もう出て往ツたかと思へば階下に宿り

込の定ちやんが寢床へ来て、いや放すの放さないのと、そこを見付けたんだもの、たゞ此まよぢやア無事に済まされない場合だよ、しかし嫉妬するにも焼くにも仕やうのない殿御だから、まア定ちやんにも疑念の懸る筈はなし、天下泰平お目出たい事さね、ほよよ」

小野貞介こゝぞと満面の微笑、

「何、そりやア汝の油断だよ、かうなれば萬事うちあけて白状するがね、實ア出かけた乃公を内々そツと這處へ呼込んだんだよ、加之も汝この通り、あられもない襦衣姿で、こんな工合に搦み付いたのが第一の怪しい證據だ、どうも過日から乃公に對する様子が變だと思ツて居たのさ、此女め、汝の降りて来るのも夢中になツて知らなかつたんだぜ」

小定、あまりの口惜しさに握りし手を放して靴足袋の上より引ツ搔けば、その機會に後も見返らず逃出す後姿を、小露、じろりと見送りながら思はず溜息を漏しぬ、

「ありやアあよいふ良人で別物だが、定ちやんは羨ましいよ、どうしても罪がなくって身に心配もないからねエ、氣樂な戯談も出来る理由さ」

いつも朝寢の小野貞介が、いつにない早起の出がけに、わざ／＼一場の悪戯を演じて其まゝ飛出せど、あとに小露は何とやら平生よりも打沈みし風情、はッと思はず溜息を漏らしぬ、
「今更ら呆れるでもないが、萬事あよいふ良人だからねエ定ちやん、そのくせ、人の知らない眞面目な時には、なかく／＼難かしいんだよ」

小定こよぞと思ふ顔色を秘して、そろ／＼緒を曳出しぬ、

「あの方に限らず世間は皆、その通りで他人面前と内證とは違ひますよ、しかしそれだけ猶更ら、姐さんの身に取て外へ出ない苦勞が多い理由ですネ」

「眞實だよ、どうせ苦勞を覺悟で、かうなつた以上、わざ／＼自慢らしく自分の苦勞を人に譽められたくもないが、ぼつと世間に知れる苦勞より知れない苦勞の方が、どんなに辛いか、泣かぬは泣くに彌増すといふ唄の文句、しみ／＼此ごろの身に沁渡るよ」

「だって姐さんに今、現在、それほどの辛い事は、ないんできやう、いはゞ小野さんのため、するだけの苦勞は、さんざ妾の知つてる通り、もう既に仕盡して來た姐さんですもの」

「ところがね、どういふもんか、この身體には、まだ苦勞が足りないやうだよ、自分では分らないが、つまり何かの因果だねえ」

小定、じつと其顔を打守りて、總身を固くしながら、俄に聲を潜めぬ、

「姐さん、いッその事、小野さんと切れて下さいな」

流石の小露も、あまりの不意を打たれて、おもはず目を見張りぬ、

「おや、定ちやん、だしぬけに妙な事をいふね」

「姐さん、實は妾、これを、此事を、言ひたくツて、言ひたくツて、いつも口まで出かけたのを、無理に今まで堪忍して居たんですよ、過日から毎日々々、押掛けて来たのも、また前夜から宿り込んだのも實は姐さんたゞ一言、これだけを、いふためですよ、なるほど、小野さんは豪い方でしやう、失禮ながら元來、お金のある方でなし、さのみ御身分のある方でなし、また美しい男といふではなし、いづれ人の知らないところに、飛放れた豪い方でしやう、それなればこそ姐さんが金罌賣まで仕て来て、かうなる理由ですが、これで今、まだ姐さんに苦勞が足らないとすれば、あまり小野さんが豪過ぎて、末が怖ろしく思ひますワ」

小露、さも苦しげに差俯きぬ。

「さう、いはれなくツても、怖しい良人なんだよ、恐ろしい良人と承知しながらやはり不思議だね、あの良人のため現に今、いはせられる事があるんだよ、妾の切れる切れないは俵置いて定ちやん、もし此頃、どツかで、あの杉山さんに逢つた事はないかね」

それとなく今までは餘所ながら探りし小定も、堪兼ねての一言、あの小野さんに切れて下さいと言出せば、それを扱置して小露の一言、あの杉山さんに近ごろ逢つた事はないかと問返されし小定、ますく自然て猶更口惜しげに膝を進めぬ、

「姐さん、かう妾、かうなれば秘さず言ひますがね、いかにも杉山さんに逢ひましたよ、また内々で相談した事もあるんですよ」

「定ちやん、かうなれば妾も、秘さないがね、實は前夜、あの良人が、さう睨んだんだよ、

きつと杉山に糸を曳かれて来るらしいから、だしぬけに問うて見る、とね」

「それですもの、萬事さういふ工合に、すぐ何でも見て取るほどの行届いた、ぬかりのない小野さんが、御自分の力にも及ばないで、もはや散々するだけの苦勞を仕盡して來た姐さんに、今また苦勞をさすといふは、よほど深い、人にも聞かされない理由があるんでしやう、どんな理由か知りませんが、それぢやア小野さん、いくら何でも、あまり酷過ぎますよ、あくどいワ」

「定ちやん、さういはれると、猶更ら苦しいよ」

「ですからさ、急に薄情な事をいふやうですが、こゝを姐さん、篤と考へてほしいんですよ、これまでの苦勞は苦勞で世間へ對しても立派に姐さんの意氣地は立って居ますし、また本人の小野さんに對しては猶更ら充分、義理も立ってるんですから、この上、わざ／＼さう

苦しますに今のうち、どうか姐さん、人の口にかよらない身の振り方もあるぢやアありませんか」

「そりやア、さうだがね」

「もし姐さんに現在、まだそれほど苦しい事をせねば、どうしても添達けられないだけの價値ある方でしやうか、あの小野さんが、今までの苦勞ぢやア乃公の女房に仕てやらないぞといはれて、泣きながら姐さん、まだ小野さんのために苦しむ覺悟なんですか」

「定ちやん、もう堪忍してほしいよ」

「いへ姐さん、言はして下さい、まだ妾は言ひ足りない事があるんですよ、どういふもんか全體、あの小野さんには、ふしぎに最初から立會負をして居なさるよ、それが妾、口惜しくって、残念でならないんです、まして今、この上、さういふ目に逢ッちやア、見て居ら

「れませんよ」

「あゝ自分ながら弱くなつたよ、考へて見れば、こんな事は妾の方から、定ちやんに、いふ筈だつたがねエ」

「何故その姐さんが、こんな事を妾に、いはして下さるんですよウ」

「親兄弟よりも、力として居た杉山さんに見捨てられた妾、また定ちやんに捨てられるかねエ」

「どうしても姐さん、まだ小野さんに苦しめられやうが、足りないんですか」

「よくく何かの罰だらう」

「長の間お世話になりましたが姐さん、もう今日ツきり、妾、來ませんよ、もう逢ひませんよ」

「定ちやん、この妾が手本だよ、これから出世の身體に、うかく馬鹿な真似をして、おくれでないよ」

二女とも顔に袖をあてゝ齒を嚙占めながら忍び音に泣伏しぬ、

いかなる不意の敵に押寄せられても、押寄せられた以上は、もはや胴骨を据ゑて顔色も變へぬ筈の小野貞介ながら、杉山章藏のためには流石の男も狼狽て、たゞ満面を皺めたるまゝ溜息を漏しぬ、

どれほどの苦しみ場合にも、その場合に落込んだ以上は、もはや諦めて鬢の毛一筋も亂さぬ筈の小露ながら、杉山章藏のために、流石の女も度を失うて、たゞ差俯きしまゝ兩眼を閉ぢぬ、

加之も杉山章藏そのまゝ階下にありて急きもせず促しもせず、音なく静かに待受けながら、をりく低く聞ゆる咳拂ひの聲に二階の夫婦は猶更降り兼ねて、板子一枚の下は地獄といふ諺あれど、これは正しく疊一枚の階下に義理人情の青海原、底も知れざる深さに身を漂はしぬ、

「ねエ良人、どう仕ましよう」

「さア、どう仕よう」

「良人が何う仕ようでは困りますよ」

「小定め、過日から用もないに毎日々々押掛けて来て、變な工合だと思ツたが、果して如斯だ、いちく見届けて、内々そつと杉山へ報告しやアがツたんだぜ、悪い氣でする事でもないが、苦しい目に逢はしくさツたわい」

「良人でもない、今更、そんな不足をいふ場合ぢやアありませんよ、現在この階下に杉山さんが居らツしやるんですもの、いくら困ツても苦しくツても、このまゝでは済みませんよ」

「濟まないから苦しいんだ、濟めば鬼でも蛇でも敵手に取つて、思案する乃公ぢやアないよ、あゝ願くは世間普通の困ツてる奴になりたい、もし杉山が出刃庖丁でも振廻して暴れ込む人間か、目に一滴の涙もない残忍酷薄の高利貸か但しは壯士の七八人も連込で来て理も非もいはず、この乃公を袋叩きにするやうな人間であつてほしいなア、いはど憎まれて敵を受けながら其反動力で世に立つ筈の小野貞介に、なぜ杉山章藏といふ濃厚篤實の知己が出来たんだらう、なぜ乃公を捨てよくれないだらう」

「ほんたうですなエ、どういふ理由で杉山さんが、この夫婦を、これまで逃げ廻る夫婦を、忘れて下さらないんでしやうか、あの定ちやんといひかういふ人達にまで無理に反いて、

わざ／＼その親切を踏付けて、實は自分も身を切るほど嫌な辛い事をするとは、なさけない、何の因果でしやう、第一また思へば、罪な業ですからねエ、イツそ妾に、考へ直さして下さいませんか」

きくや否、俄に頭をあけて物凄き一種異様の兩眼を光らせながら、のツそりと立ちし小野貞介、

「や、面倒だ、降りて杉山に逢はう、聊か酷だが、やはり杉山も浮世全體を敵と見る乃公の面前に廻った人間だ」

浮世全體を敵と見た以上、聊か酷なれど杉山も其うちの一人といふ小野貞介、慌て引止めし小露の手を振り切りながら、悠々と二階より降来りしが、流石に人情の鐵壁、我家の襖一重を

容易く開け兼ねて、おもはず暫し停めば、室内に待受けし杉山章藏の聲、平生になく腸へ徹へぬ、

「小野君だね、客の方から變だが、サア遠慮せずに這入ッてくれ」

小野貞介、もはや遁け込む穴もなく、すつと襖を引開けながら、長火鉢を隔て杉山の面前に差對ひぬ、されど斯くまでの大膽なる男、何とやら首骨を垂れて、猛獸の物に怖るゝが如し、

「心にもない御無沙汰をした、實に合す顔もないが、現在、かうして訪はれて見れば、二階と階下だ、出ずに居れないから己むを得ず、重ね／＼この鐵面皮を君の面前に曝すよ」

「はよよなアに、さういふ量見で、わざと窘めに來たンぢやアない、一旦、あんな工合に別れたが、また妙に君の顔を見たくなッてね、はよよ時に細君は其後、ます／＼貞節だ

らうな、相變らず達者かね、在宅かね」

「小露も、無事に居る事は居るが、降りて來られるかね君、察してやツてくれ、甚だ濟まないが何卒、あのまゝ二階の隅へ隠れさせて、やツてくれ、首を取りに來ても取られる理由さへありやア、さのみ遁隠れも仕ない筈の女だが、君の聲を聞いて、小さくなツてるよ」

「むゝさうかい、敵でもない僕の聲を聞いて、あれほど場馴れた勝氣の女が、よう降りて來ないか、二階の片隅へ鼠のやうに小さくなツてるかい氣の毒だなア、かはいさうだなア、かういふ目に逢はすため、わざ／＼この杉山が君を選んで取持ツた理由ぢやアなかつたに、や、惜しい名物女を日蔭に腐らして仕舞ツた、つまり僕が悪かつたんだね、同じ取持つなら腕のない、馬鹿でも俗物でも歳の違ツた禿頭でも隠居老爺でも、ウンと金のある奴を取持ツて安樂に身を過さすか、但しは俳優でも色男に持たして、やはり藝妓は藝妓の全盛に、ば

ツと一時の快樂をさしてやれば宜かつたに、とんだ男を取持ツたよ、ねエ小野君、どう考へる、もし君が傍へ退いて、他人となツた目から見ればだ、それも天生か成行次第の當世風に出來た尻輕で、合せものア離れものといふ其場の都合上に出たり這入ツたりする女なら兎も角、憐むべし、あれは君、あくまで優しい脆い情の醇なるものを、あくまで強い固い意氣地の張合に包んだ女だからね、いくら苦しい目に逢ツても悲鳴は出さぬ、出さぬが、この悲鳴を出さぬだけ猶更慘憺だ、たま／＼この杉山章藏が訪うて來て、病氣でもないに二階の隅へ小さくなツたまゝ降りて來られないとは、聞くに忍びんよ、是非とも降りて來るやう、良人たる君が引張ツて來てくれ、どういふ深い理由があるにしろ彼が妻として君に對する事は別問題だ、しかし、この杉山は杉山として彼を取持ツた初志に反してゐるから、あらためて本人に謝するところなければならん、どうだ小野君」

諺にいふ將を覘ふものは先づ馬を射よとの筆法、じろりと天井を睨み上げて、其まとの眼球を小野貞介の眞正面へ打付けぬ、

小野貞介、自己が今夜の矢面に立つ覺悟、思ひ切つて面の皮を厚く振向けし甲斐もなく、不意に仰いで案外の天井を射抜かれ、さも苦しげに満面を皺めながら杉山章藏の顔を打守りぬ、「なるほど、たまく訪うてくれた君の聲を聞けば、外に親類縁者のある女ぢやアなし、いそぐ喜んで降りて来る筈の小露が、かはいさうに二階の片隅へ小さくなつて、隠れるやうに仕たのは實に僕の業だ、しかし杉山君、何卒、あのまゝ隠れさせてやつてくれ、その代りに小野貞介、こゝでは物足りまいが、どんな晴の場所へ出て面の皮を引剥かれても一言、君に對しては言葉を返さない、この通り、首を下けてるよ」

杉山章藏、いつにない今夜の手強さ、頑として聞かぬ色を現はしぬ、

「いや、さう取ツちやア不可よ、現在、今彼を二階から降りて來られないやうに仕たのは君の業だらうが、その君へ最初に取持つたのは僕の業だ、加之も實ア入らざる事まで自慢してね、半以上、殆ど教唆的に取持つた僕の心中、大に濟まないから、あらためて本人に謝するんだ、なアに本人が斯うなる事を承知の上で、さう氣を揉んでくれるに及ばないと斷言すれば、それで僕も安心するのさ、しかし君の取次で、安心が出来ないよ、是非とも本人を二階から降してくれ」

小野貞介も今は絶體絶命、そろく言葉に一種の沈痛なる調子を帯び來りぬ、

「杉山君、今に始めぬ君の芳志は夫婦のため、實に有難いが、そりやア君あまり皮肉な註文ぢやアないか、幾度もいふが察してくれ、今更小露が降りて來られるかね、また僕が君の

「面前へ引卸せるかね、只この通だ、感謝するに止めてくれよ、小野貞介、君に對ツちやア泣くより外にない、定めて小露も、二階で泣いてるだらう、まるで一場の悲劇だなア」

杉山章藏も今は眼中に涙を含みぬ、

「なぜ泣く、なぜ泣くんだ、なぜ彼を二階の隅で泣かすんだ、泣かれに來た杉山章藏ちやアないよ」

「泣かざるを得ない、君に對して泣く外に手も足も出るかね」

「夫婦が階上と階下で、泣くより外に手も足も出ないほどの悲劇を演じて全體、どのくらゐの價值があるんだ」

小野貞介、暫し無言のまゝ差俯きしが、もはや言葉に窮せし最後の一物を拋出しぬ、

「どのくらゐの價值だと、聞かれては困るが、まづ君へ對する感謝の極を盡すと共に、ある

方面の看客へ對しては、尠くも三百萬圓、以上に當る筈だ、つまり浮世は一の大劇場、その初無臺に登る夫婦が演劇料としてさのみ廉くない筈だ」

杉山章藏、今更の如く兩眼を見開きぬ、

「いよく君、決行するんだな」

「するんぢやアない、實は既に決行、しつゝあるんだ、杉山君、この大悪人を君まだ朋友に持つ覺悟か、君の聲を聞いて降りて來ない彼も既に、實は登場の衣裳を着けて樂屋を出るばかりになつてるんだ、こゝまで白狀すれば、もはや他を語るに及ばない、但し今日まだ幕を開けないから、もし潰さうと思へば今のうち君の一擧手一投足で美事に潰し得らるよ、他の奴等ア幾千萬人の有藏無藏が押寄せて來ても、するだけの藝は演じて見るが、奈何せん、君一人の力には叶はない、この間一髪、活殺自在正に君の掌中にありだ、さア杉

山君、どうでも仕てくれ」

もはや進退こゝに谷りし小野貞介、苦しさの餘りに猛然として遺憾なく自己の本音を吹出しぬ、

小野貞介が杉山章藏に對うて、まだ君この大悪人を朋友に持つ氣かと吐きし一言は、流石の男も義理に迫つて進退こゝに谷りし慘憺の極なれど、また一方より見れば遺憾なく自己の大膽を現はして、ある目的のためには何物をも犠牲に供せんとする傍若無人の體、斧を揮つて花を碎くが如し、

加之も浮世を一大劇場と見て、その初舞臺に登場すべき夫婦の演藝料は尠くとも三百萬圓以上、さのみ廉くない筈とは、いよく憚りもなく腹の底の本音を吹出せし顔色、もはや

世間普通の道理を踏破つて個人主義の權化となりぬ、

これまでの小野貞介は、まだ多少の包むところと憚るところありて、その片脚を世間普通の道理を踏残しつゝ、かの小定にさへ屢々驚かされ、この杉山には猶更狼狽へて追出せしがもはや今は遁けも隠れもせぬ小野貞介、あはれ既に一個の悪魔と化し了りぬ、

いかに過激の大膽なりとて、いかに頑強の不敵なりとて、いかに怖ろしき大執着心の性質なりとて、腸を絞る我熱涙を注げば一片の友情を惹起すべき筈、よもや斯くまでとは思はざりしに、思ひの外の杉山章藏、たゞ啞然として立去りぬ、

されど去るに臨んで最後の一言を残しぬ、

「今後の小野貞介といふ人は、いかなる事をする人間か、斷じて杉山章藏の與かり知るところでない、しかし今までの小野貞介は杉山章藏の朋友で、その朋友から一場の戲談に聞いた

こつたが、當時都下に屈指の富豪を以て稱せらるゝ田口徳兵衛といふ老爺の財産を天變地異の外で、容易く人間業に奪ひ取る工夫をしてる奴があるさうだ、もし事實とすれば出来るもんだらうか、はよよよ」

小野貞介、木像の如く立ッて見送りながら靜に首肯きぬ、

「や、出来るさうだよ、駿河臺に魏々たる洋館の三層樓、ありやア鐵骨石皮の大建築で、なか／＼地震にも崩れないさうだが、人間業は恐ろしいね、柔軟い三寸の舌頭で、ペろりと舐め倒す事は倒せるさうだ、はよよよ」

杉山章藏また振り返りての一言、

「世の中には、良人として自己の妻を生きながら屍にする奴があるさうだ、一氣に刃物で斬殺すよりも残忍だな」

小野貞介、また見送りての一言、

「無論、あるだらうよ、しかし、その妻はその良人に殺さるべき運命を持つて現世に生れ出たんだね」

杉山章藏と小野貞介、此まゝこれを生涯の最後として別れしが、膈を斷つ苦しさ、互に人知れぬ男泣の涙を熱湯の如く呑込ぬ、

犠牲の文字は、祭禮に犧を飾りて廟前に牽き行き、これを屠りて神に供するためなりといふ、平生は野にありて草に臥し人に追はるべき牛が、いつになく身を紅白の彩華に飾られて賓客の如く厚遇せらるゝ時は、これぞ自己の生命を取らるゝ最後とも知らず、夢かとはかり喜びながら死地に牽かれ行く哀れさ。祭禮の犠牲のみか浮世の人間また此運命に歩み行くもの多

し、
されど牛は殺さるゝまで喜び勇みて、その殺さるゝ時に始めて悲しみ、世間あらゆる多くの人は身を亡ぼすまで歡樂を盡して、その身の亡ぶる時に始めて泣く、いづれ槿花一朝の榮華ながら、絶えず最初より最終まで泣いて悲しむものなし、
只こよに悲惨の極なる例の小露は、いかなる不運の悪縁か、小野貞介に添うて以來、元の野にありし頃よりも猶更の憂苦勞、あはれや槿花一朝の榮華さへ夢に見る違もなく、加之も既に其身の犠牲にせらるゝを知りて、かくならぶる最初より腸を斷つ悲哀を忍びながら、覺悟の上に身を飾りて今や最後、廟前に牽かれ行く心地、あゝ櫛卷の筒袖に金鐙を賣歩いた時が戀しいとは、自から我身を弔ふ一種の大文章なり、
まして骨肉の兄に勝る杉山章藏といひ親身の妹に勝る小定といひ、この二人が内外相應じて

幾度か救ひ出さんとせし眞心にまで反きながら、人知れぬ血の涙を吞んで猶かつ小野貞介のため、何等かの怖ろしき犠牲に供せられんとする小露、そもくいかなる不思議の因縁に生れしか、

小野貞介が杉山章藏に別るゝ最後の一言、彼は我ために殺さるべき運命を持ちて現世に生れ來りし女なりとは、苦しまぎれに吐きし其場の悲鳴ながら、これまた小露の身に取って一片の弔詞なるべし、

戀のためか、情のためか、自然の縁か、遁れ難き意氣地か、もし戀ならば初心の處女でもない桔梗屋小露の果、かくまで身を苦しめずとも小野貞介に對する戀は遂げ得らるべし、もし情ならば浮世さまぐの人情を知りぬきし名物女、かく迄人知れぬ腸を絞らすとも小野貞介に對する情は盡し得らるべし、たとひ自然の縁にせよ、結びしより僅か三年の赤繩、解かば

「どうも、かうも、まるで論外だ、療治の仕やうがないよ」

「ないでは猶更貴君、だから貴君に今夜、わざ／＼往つて戴いたんぢやアありませんか、今こゝで貴君が、さう一途に怒つて下すつちやア」

「そりやア、さうだがね、かはいさうに夫婦とも、性根が腐つて仕舞つたよ、もう仕やうがない、まさか、あれほどでもないと思つたがね、つまり馬鹿正直に思つたのは此方だけだ」

「夫婦とも、小野さんは兎も角、姐さんが貴君に對して今夜、どう言ひました、どうして居ました」

「小野の奴は、眞正面から乃公に對つて絶交の態度だ、また小露は二階へ隠れたまゝ降りて来ない、どう言つても降りて来ないよ、やはり乃公の道理より小野の不道理が宜いと見えぬ」

「降りて来ない、そんな筈があるもんですかね、小野さんは眞正面から貴君へ、どう出たか知りませんが、姐さんに限つて、つまり貴君が降りて下さらないでしやう、無論、平氣に降りて来られない事は分りきつてゐるんですから、そこを杉山さん、お願い申したんぢやアありませんか、たゞ降りて来ないでは困りますよ、是非とも降りるやうに仕て下さらないやア、折角お力になつて戴いた甲斐も何も」

「ないといふんだらうが、ないか、あるか、今夜の事實に接した以上、もう乃公は断念した、よし手を持つて引摺卸しても、本人が降りて来ないんだ、つまり小野が乃公に對する絶交と共に、小露も乃公に對して生涯二度と再び顔を合さない覺悟だよ、儲さうなると義理も人情も入らない乾燥無味なもんだ、乃公は他人だからね、對手は夫婦だからね」

小定、其まゝ俄に駈出さんとする勢に杉山章藏、思はず袖を掴みぬ、

「おい、おい〜待てよ」

「放して下さい杉山さん、妾どうしても妾、此まよでは歸れません、小野さんは借置いて姐さんが、あの姐さんが貴君へそれでは濟みますかね」

「濟む濟まない場合は、通り越して仕舞ッてるよ、もう無効だ、捨てる」

「いよえ妾、捨てられません、かりそめにも貴君へ向ッて、そんな、さういふ姐さんぢやアないんですから」

「ないッて、事實、さうだよ、まア兎も角乃公と同伴に來い、ありやア小定、もう汝の行くところぢやあないぜ」

「すよ杉山さん、妾、どうしましやう、どうしたら宜いんでせうねエ」

娯樂にも悲哀にも、人知れぬ家の内にありて、夫婦差對ひの中間に動かぬものは冬の夜の長火鉢、口はあれど思案の邪魔と軽く取退けらるゝ鐵瓶の後に、もしこの長火鉢をして無遠慮に語らしめば、世間いかなる家庭も十中の八九、この長火鉢より案外の秘密を曝露すべし、ふけ渡る夜の燈下に寝もやらぬ小野貞介と小露の二人、またこの長火鉢を中間に隔てながら、互ひに顔も見合はさず、をり〜溜息を漏して私語きぬ、

「いつまで考へても同じ事だ、いよ〜やるだけの事を、やらなかりやアならない場合だ、世間萬人の包圍攻撃よりも苦しく辛かった、あの小定と杉山に對して勢ひ、あよした以上、さア、もう一點の顧慮するところはない、誰に憚るところもない、目的は手段を辯解してくれる世の中だ、思ひ切ッて、やれ、どうせ港を漕出して、もはや沖へ出た舟だぜ、いづれ多少の雨も風も、浪もあるだらうが、そりやア固より覺悟の上ぢやアないか」

小露、いよく差俯いて、何とやら濕り勝なる風情、聲に涙を含みぬ、

「やりますよ、やりますよ、最初から得心してかゝった承知の捨身ですもの、今更未練らしく、卑怯に後へは退きませんがね、現在また退く事も出来なくなつたんですから、やる事は思ひ切つて、これが桔梗屋小露の自然かうなる運命の果と諦めて、立派に悪度胸を据ゑて、やりますがね、妾、どうしても、定ちやんが可哀さうでなりませんよ、何故、他人の妾をあゝまで思つてくれるんでしやう、わけて杉山さんには、猶更ら、いかにも濟ませんから、やる前に何かと、も一度、逢つて、お目にかゝつて」

「おい、おい、今となつて何を、いふんだい、それほど小定と杉山に濟まないと思やア、乃公に構はず、潔よく、潔白に、はつきりと退いて仕舞へ、たとひ汝が離れて退いても一且、やりかけた事は事で、小野貞介は依然たる小野貞介だ、忽ち來つて乃公が生命を眼前

に奪ひ得らるゝものゝ外、天下、人生、もはや何物でも乃公を動かす事ア出来ない、また今こゝで汝が退ても去つても、これまでの汝に對して涙と共に感謝するのみだ、今後の汝に對して一切、さらに不足がましい、恨みがましい氣を持つやうな乃公ぢやアないぜ、寧ろ二の足を踏んで前後躊躇の煩悶をさすに忍びない、つまり義理に負けて小定と杉山に付くか、悪縁に引かれて小野貞介に付くか、去就の一刹那、こゝが所謂一刀兩斷だ、どうする、もし口でいへなければ、この火鉢の灰へ、書いてくれ」

小定は固より眼中に置かねど、多年の知己たり恩人たる杉山章藏に對して眞正面より絶交を叫びし以來の小野貞介、平生の駄洒落し顔色もなく、じろりと物凄き目の光端を額越に射放てば、流石の小露、押潰さるゝ如く堪兼ねて、袖に餘りし泣聲を立てぬ、

「嗚呼、死たいねエ」

「そこだ、その死を、乃公に、くれ」
 「あけますよ、あけますから早く、一時も早く、殺して下さい」
 そもくこの夫婦の間に死といひ殺すといふ言葉は、いかに苦しくいかに辛く、いかに深き意味を藏せるか、いかに怖ろしき秘密を含めるか、

いかな下戸も一斤の砂糖は事實に於て、さう急に甜め盡せぬ筈ながら、神田の駿河臺に満都を見下す鐵骨石皮の大建築、當時屈指の富豪を以て世に聞えたる田口徳兵衛の財産を、べろりと三寸の舌頭に甜め倒さんとする小野貞介、そもくいかなる不可思議の魔力ありてか、まして田口徳兵衛といふ今年六十七の禿老爺、これが世間普通たどの隠居老爺でもある事か、その來歴を洗ひ出せば、柳原の古着屋にコキ使はれし白雲頭の素丁稚がら自己一代の運根鈍

に仕上げて、今は五百萬以上の大身代に數へらるゝ老爺、その根性を洗ひ出せば、十錢銀貨一個の紛失に三年以來の奉公人を叩き出したといふ談話の種を實際に持った老爺、また利害の點を見れば、向島の花見に馬車を聖天横町へ繋ぎながら二錢の渡し船より一錢の剩餘を取りしといふほどの老爺、勿論その邸宅も馬車も自己の財産を缺いて支出すべき筈なく、十三個所の諸會社へ重役の名ばかり貸して得たる配當金の利子より産出せばこそ、氣絶もせず平氣に乗廻して殆ど虚日なき宴會招待の御馳走を喰歩くほどの田口徳兵衛が、親類でも縁者でもない無縁の他人の小野貞介に白日青天の下、そもくいかにして鏝一文もチヨロまかさるゝべきぞ、

只この間に介在せる一の大怪物、いはど人知れぬ神算鬼謀の骨子となりて幾重の鐵壁に等しき田口家の鍵を音もなく捻切るべきものは例の小露、さりとて世俗にありふれたる赤本の小

説めきし美人局でなく、また今日の中に實行し得られざる反間苦肉の夾撃でなく、夫婦うち揃うて誰憚らず玄關の眞正面より正々堂々と出入しながら個人主義の權化ともいふべき此禿老爺を、酒に痛めし骨ぬき鱈の如くせんとは、抑もいかなる怖しき秘密の手段ありてか、

この不思議なる魔力の實行と、この怖ろしき秘密の手段とは、著者の最も大膽に最も露骨に最も周到なる具體的に筆を執りたき要點なれど、惜哉この奇々怪々なる神算鬼謀を著者に授けたる或策士の注意と、動もすれば一種の好奇心に驅らるる青年讀者のため、遺憾ながら殊更ら一切ことに伏せて、たゞ神算鬼謀といふ古來の常套語中に埋めりぬ、

されど自己に利益あるものゝ外は、何人と雖も一切これを謝絶して、いかなる事情の下にも足踏させぬといふ、その田口徳兵衛の應接所には、その田口家の財産を濡手で粟の掴み取にせんとする小野貞介と、眩きばかりに盛装せる小露が、交るゝ絶えず自由自在に出入し始めぬ、

今日の世の中に知己と稱し朋友と稱するもの、多くは酒と金の力によりて結ばる、酒あれば知己あり酒なければ知己なく、金あれば朋友あり金なければ朋友なく、酒色のために知己は離合し、利益のために朋友は集散し、只これ飲むと掴むの外に知己も朋友もなし、されど世間また酒と金との外、杉山章藏の小野貞介に對する如き心の知己あり、誠の朋友あり、其主義を憎んで幾度か捨てんとせしが捨つる能はず其奇才を惜んで幾度か破らんとせ

しが破る能はず、果は彼より破られ彼より捨てられて一朝こゝに多年の交際を断たれながら、なほ彼がために其秘密を守りて其前途を遮ぎるに忍びず、人知れぬ苦惱煩悶、殆ど自己の身に疾病あるが如し、

下谷竹町の家を襲うて最後の涙を注ぎし甲斐もなく、たゞ絶交の一言に啞然と去りしより凡そ一月餘の後、一日の朝、流石に商人の杉山章藏、新聞を手に取りて先づ廣告欄を見れば、最も人目を惹くべきところに三段ぬき百行の二號活字、

小生儀近來の老體と共に聊か健康を失し候ため今後小生に關する一切の應接向を舉げて左の者に一任仕候間此段爲念辱知諸君に御報告申上候

追而從來既に商法上の規定に依り設立罷在候銀行業務其他の諸會社に就ては無論關係爲致間敷候間此義併而申添置候

神田駿河臺 田口徳兵衛
應接掛 小野貞介

不肖儀田口徳兵衛代理として同人に關する今後一切の應接向を委任され候間此段御通知申上候

午前九時より午後三時まで駿河臺田口徳兵衛方に出張致居候

日曜大祭日は親疎緩急に關らず御面會を謝絶仕候

一時間以上の應接は己むを得ざる儀の外御免を蒙り候

金錢直接の事務は取扱不申候

如何なる事情關係の下にも不肖の私宅應接は断じて不仕候

右田口徳兵衛

代理 小野貞介

杉山章蔵、あつと驚いて俄かに容を改め、手に持てる葉巻を火鉢に投込むや否、この廣告文に一種異様の眼光を注ぎながら、暫し其まよ木像の如くなりぬ、

いつまで眼を注けど、いかに見直せども、この廣告文は最も經濟上に有力なる都下の八新聞に一字一句の誤植もなく掲載されて田口徳兵衛と小野貞介の姓名は殆ど父子の如く並べられぬ、

九尺二間の裏長屋より飛出して丸裸のまよ一大銀行の頭取となるが難きか有財俄鬼の權化といはると個人主義の化物、あの田口徳兵衛の代理者となるが難きか、いづれにせよ今日の間

が今日の社會に對うて、夜半の夢にあらざるかぎりは到底、出來得べからざる事ながら、その出來得べからざる不可能的事實を團子細工に等しく、卒然として世の中に捻り出したる小野貞介、そもくゝいかなる魔術ありてか、

既に設立せる従來の銀行業務その他の諸會社には一切の關係なく、また將來に於いても金銭上の事務は直接これに當らず、たゞ老體に代りて今後一切の應接を委任されしのみとは、明白に自己の分限を示して都下の八新聞へ掲げ出せし言責ながら、現在その銀行と諸會社を有せる田口徳兵衛その人の代理者となりし小野貞介、たゞ新聞紙上に現はれたる文字上の死物となるべき男なるか、天下の法律は既往に遡らずと雖も、この男が周到緻密なる大膽不敵と殆ど不可思議の域に達せる天生の奇才とは、いかにしても一個の豪富老爺が立關番となるべき筈なし、

そもく田口徳兵衛といふ老爺より金錢を除いて餘すところ、何物ぞ、そもく田口徳兵衛といふ有財餓鬼の立關番となりて得るところ、何者ぞ、まして小野貞介が新聞紙上へ掲載せし文字中の死物にあらずとすれば、人知れぬ心の鞭をあけて指さす方角、いよく敵は本能寺にあるなり、

さるにても十錢銀貨一個の紛失に三年以來の奉公人を叩き出せし田口徳兵衛がこの明智光秀に輪をかけたる如き、曲者の小野貞介を、いかなる理由の下に容れしか、いかなる必用の下に招きしか、いかなる魔力に摺まれしか、いかなる神算鬼謀に捕獲せられしか、その間に小露といふ怖ろしき女の潜める事を知るものは、世間たゞ杉山章藏の一人あるのみ、されば世間いづれも田口徳兵衛の如何なる老爺なるかを知りて、その老爺に斯くまで不思議に任用せられし小野貞介は、いまだ其名を聞かざれど正しく無爲無能の馬鹿正直として、寧ろ却つて一種の信用を世間に發表せしが如し、

只こゝに小野貞介の知己朋友として加之も秘密の一端を知りし杉山章藏はその大膽に呆れ、その奇才に驚き、その魔力に思はず身の毛を立てて震ひ怖れぬ、

さて田口徳兵衛といふ老爺、柳原の古着屋に白雲頭の素丁稚より身を起して自己一代に都下屈指の富豪となりしのみか、ことし六十七の今日まで總一文も他人の業に仕てやられざりし奴が、もはや餘年なく葬式に間近き今となりて案外の怖ろしき一大怪物を抱込んだり、

この廣告文の新聞紙上に掲げられしより凡そ三月餘の後、横濱に商用の杉山章藏、新橋のステーションに汽車の時刻を待合せし時、この混雜中に小野貞介が旅行の姿を、ちらと認めぬ、

横濱へ商用の杉山章藏、新橋のステーションにて前後左右の混雑中、ちらりと小野貞介の姿を見るや否、はつと俄かに自己が身を人混の中へ隠し入れぬ、
 下谷竹町の家を襲うて最後の涙を注ぎながら、絶交の一言に別れし以來こよに殆ど五月目、田口徳兵衛の代理者となりし廣告文に驚いて、おもはず身の毛を立てしより三月餘の今日、その小野貞介が其後ますます無事息災に肥太りしのみか、さらぬも不敵の面魂いよく意氣揚々たる旅行の姿を見て、何とやら怖ろしく物凄く床しき懐しき一種異様の感に打たれぬ、もはや絶交せし奴、一旦あの時に捨切りし奴、既に顧みる心も情の必用もない筈の奴ながら、今その姿を見れば、斧を入れし悪木に花の咲出でし心地、また思はず不思議に捨兼ねて、加々も我姿を見せじと隠れし杉山章藏、自己が横濱への商用は措置き、彼が旅装は何處に向ふためかと頻りに其發車時間を窺ひぬ、

やがて神戸終點の東海道線が發車すべき時刻となれば小野貞介、赤帽に手荷物の大鞆を荷がせながら、白切符を切らせて悠々と一等室へ乗り込みしが、都下屈指の富豪たる田口徳兵衛の代理者として、更に一人の見送人もなきは、果して彼が天生の慷慨的を撰びたる單騎奔馳の状態、人は知らずありくと杉山章藏の目に刻み込むが如く映じ來りぬ、

汽笛一聲、今や將に發車せんとする時、わざと後れし杉山章藏、慌てゝ俄かに同じ一等室へ飛入りぬ、

此方の片隅に腰うちかけながら、じろりと見れば、始めて心付きし小野貞介、また彼方、片隅に腰うちかけながら、はつと驚きし體、流石に其まゝ差俯きしが、一言も出さず、一寸も動かず、杖づけるステッキの上に兩手を重ねて伏せる木像に等しけれど、をりく額越に電光の如く、ぴかりと眼球を光らしぬ、

杉山章藏、すつと自己が席を立ッて近く身を措寄せつゝ腰うちかけぬ、

「どこへ行く」

「小野貞助、宛ら不意の横腹に白刃を刺されしが如き顔色、

「すまない、すまない、御無沙汰を仕たよ、實に濟まない」

「なアに無沙汰は互だ、そりやア、兎も角どこへ行くんだ」

「ちよいと、神戸まで」

「むと神戸、幸ひだ、僕も急用で神戸へ行くんだよ」

「杉山君、多言の要はない、どうか、この次の驛で降してくれないか」

「をかしい事をいふね、降りる降りないは君の勝手だが、この汽車ア神戸までの特急だらう、たとひ思ひ出した用があつても久しぶりの僕に對して、終點まで附合ッてくれよ、細

君、無事かね、よほど君も僕の間に肥ッたやうだ、此頃ア定めて繁忙だらうな」
言葉は簡單なれど、いち／＼疊みかけて急所を突かれし小野貞介、いかにせしか、何と感ぜしか、みる／＼うちに兩眼へ男泣の涙を含みぬ、

富めば無縁の他人も寄集まり、貧しければ血筋の親族も遁れ去る、うき世の輕薄たゞ人間の
上のみならず名所舊跡の上にも亦この離合集散あり、詩人の所謂墨堤十里、東都第一に數へ
らるゝ花の名所の向島も、冬は枯木の枝に首でも吊る奴の外、絶て人影なけれど、いざ春と
なれば、俄に思ひ出したる如く猫も杓子も一時に騒ぎ出して、出るわ／＼雲を遮る櫻花爛漫
の下に一寸の地を餘さず押合ひ押合ふ人の山、平生は見向もせず御無沙汰しながら、此ま
と生涯／＼に居たいと吐す現金な奴さへあり、

その現金な奴等に押合ひ押出されて、おもはず土堤より下の田圃路へ遁出したる一群は、春の色香と争ふ紅粉の香を残して、誰が目にも藝妓と見るや否、武藏の國の住人だけは間違なき泥醉漢の熊谷面、こいつ面白いと扇の代りに空徳利を振廻しながら、花に落行くか敦盛、返せくの大聲に追廻せば、四五人の藝者ども猶更恐れて、ちりくばつと青田の畦を通廻りぬ、中にも一際すぐれて目立ちしは例の桔梗屋小定、浪打際に取つて返す勇氣もなく、遁けながら振返れば、泥醉漢の熊谷次郎、いよく我身一人を追來る體に、またもや田圃路一散に落伸びつゝ、どこかは知らず幸ひの森蔭に遁入りぬ、樹間より透して見れば、土堤の櫻に僅か二三町ながら、曲りし畦路を右に左に通廻りしかば、思ひの外に勞れて胸轟きつゝ息を切りぬ、いづこへ遁散りしやら、朋輩は見失へど、もはや追ひ來る泥醉漢の影もなく、其まゝ其處に

暫し蹲まりながら、ふと何心なく背後を見返れば、花に飽いてか青木ばかりの庭の葉越に奥深く二階家屋、隙間なく茂れる扇骨木の生垣を廻らして、道は近けれど浮世に遠く隔てし萱葺の門、扉さへ固く閉ぢて、この春の衣香扇影を知らず顔なる風流さ、いかなる人の別荘ぞと羨ましげに立寄りて見れば、門の柱に小さき表札の文字は、小野貞介、小定、はつと思はず飛退きながら、垣根越に二階を見上げて、腹が立つやら懐かしいやら、怨恨の目元、はや涙を含みぬ、

男は男、杉山章藏は泣いて小野貞介と交を絶ち、女は女、小定は小露と涙の袖を分ちしより、心に忘れねど身に懐しけれど、訪ひもせず訪はれもせず、いつしか其まゝ過ぎて丸一年越の春、

花の嵐の泥酔漢に追はれ、手を繋ぎし朋輩に放れて、やうく逃入りし畦傳ひの森影に、思ひきや、その戀しく懐しく偕は恨めしき人の隠れ家、別れし後の事を思へば、あまりの懐しさに去りも得せず、現在こよと思へば、あまりの恨めしさに入りも得せず、わづか二町餘りを隔てし花の外なる花一輪、春は春ながら、人知れぬ秋の心地に打濁れぬ、折しも葉越の二階に障子の開く音、小定、はつと思はず身を潜めて透せば正しく小露の面影、腹が立つやら嬉しいやら、もはや我を忘れし小定、其まよ門の扉を引開けて走せ入れば、驚きながら二階より見下す顔を、ちつと見上げて俄の泣聲、

「ねと姐さん」

丸一年越この宿に浮世を捨てしより、春に後れし鶯の啼音に身につまされ、五月の空に血

を吐く杜鵑に胸を割かれ、叩く水鶏に寢覺の枕を驚かされ、さては秋の草葉の虫の音に袖を濡らして、かすくの憂身を誘はれし小露ながら、今この一聲にて腸の底を扶らるゝ苦惱、二階の欄干に落つるばかりの身を伏しかけぬ、

「定ちやん、降りても宜いかねエ」

小定、飛石の上に立ちながら、もはや再び見上げも得せず、顔に袖をあてゝ泣きながら首肯きぬ、

「姐さん、降りて下さい、降りて下さい丸一年越ですよウ」

「降りるよ定ちやん、降りたら、今までのやうに、逢ッておくれだねエ」

「姐さん、此まよ歸れますかね」

二階より走せ降りて、下座敷の障子を開くる間も遅しと、庭に立出でし小露、

「よくまあ、忘れもしないでねエ、兎も角も妾の、居室まで、あの良人は居ないから」
されど何とせしか、今更立ちしまゝに動かぬ小定、

「姐さん、やはり妾、もう上らないで、歸りますッ」

「何故、なぜ」

「折角、降りて貰った事は貰ひましたがね、考へて見ると、また姐さんを辛がらせるだけで
すもの、たゞ無事な顔さへ、それで妾、澤山、外に何も、いふ事はありませんから、この
後も煩はないやう、身體を大切にして下さいよ、あと来るンぢやアなかつたに」
「定ちやン、汝も随分、氣の強い妓になつたねエ」

顔に袖を押當て、庭の飛石に立ちしまゝ、今更動かぬ小定を無理に引入れながら、また其身

も今更急に言葉なき小露、たゞ涙ばかり先立ちぬ、

「よくまあ、どうして知れたの、あの後すぐ下谷の竹町を引越して仕舞ッて、あの良人の
身體こそ絶えず外へ出るが、妾は自分で作つた座敷牢、こゝへ来てからといふもの世間へ
一切、影も見せない筈だに」

元來の美人は美人ながら、さても其後さるほどに人知れず如何なる憂身の苦勞せしか思ひの
外に瘦せて打沈める小露の顔を、ぢつと打守りし小定、

「それだもの、どうして知れる筈がありますかね、また杉山さんに對しても、引續いて相變
らず其後、いろ／＼お世話になつて居ますからね、猶更、妙な工合で、たゞ心に思ッてる
ばかり、いくら探したくも探されませンよ、實は今日も、わざ／＼來た理由ぢやアないン
ですよ、この向島の奥に或會社の觀櫻會があつて、それへ呼ばれたンですが、枕橋から俤

停止で仕方なしに五六人、あの人出の中を歩いて行くと泥酔漢に悪戯られて、ちり／＼に田圃路を通けたんですが、まさか姐さん、こまに、かうして居なさるとて夢にも妾、知りませんでしたよ、閑静な住家ですねエ、嗚呼、こんな事で不意に泣いて逢はず、をり／＼楽しく面白く昔談話に朋輩でも誘うて、かういふ風雅なところへ暢氣に姐さんを尋ねて来たい事ねエ、あの二上りの文句にあるちやアありませんか、隅田の邊に住居して、萩の柴折戸、四疊半、なぜ姐さん、さういふ調子に妾等を羨まして下さらないんですよ、第一また大變、どうしたか、お瘦せなすった事ねエ

「瘦せもするだらう、病氣になつて、死で仕舞はないのが不思議なくらゐるさ、そつちで意氣な二上りの文句を出せば、此方は心に泣いた由良さんの文句そのまよ、風雅でもなく洒落でもなく詮う事なしの住居だよ、しかし定ちやんは、ます／＼貫目が付て來た事ねエ、杉山

さんお達者、あの方には、わけて濟まない義理だが、さて今更ら、お逢ひ申す事は出來ずもし何かの談話にでも出た節は、それとなく定ちやん、よつ／＼、お謝罪して置ておくれよ、たとひ、どうなつても、決して恩を忘れるやうな女でない、ね、實は陰ながらいつも思ひ出して、届きは仕まいが拜んでるよ」

「そこまで姐さん、夫ほど思つて居なさる姐さんが何故、どういふ理由でわざわざ杉山さんが竹町へ往つた時、二階から降りられなかつたんです」

「あゝ定ちやんも氣樂だね、まだ苦勞の足りない若いところがあるよ、考へて御覽、あの時、二階から降りて、あの杉山さんに逢へる妾かね、あの場合、もし平氣に降りて逢へる妾なら今こゝで、かうは仕て居ないさ」

「ちやア今、こゝで姐さんは、どう仕て居なさるの」

小露、ほろ／＼と目に持つ涙をこぼしぬ、
「定ちやん、今こゝに居る妾は、生きた死骸だよ、どうか斯うか人に持嚙されて自分もまた面白かつた小露は、かはいさうに、無くなつて仕舞つたんだよ、藝妓こそしたが、さのみ悪い事をした覺はないにさ、何の因果だらう、わづか差渡し二町たらずの目の前に春が来て、あの通り櫻の花ア咲いてるが定ちやん、妾は、こゝで、もう二度と再び世に出られない埋れ木になつて仕舞つたんだよ」

いかに其身を不運に捨てし悲鳴か、今こゝに居る妾は生きた死骸だよと、いひし小露の一言に、さらぬも打沈みし小定、何とやら物凄く感じて、そつと思はず腸の底まで寒くなりぬ、
「姐さん、生きた死骸とは、どういふ事ですの」

小露、猶更ら胸を割かるゝ心地、

「どこまでも人に知られた元の小露で通せば、さのみ自分の心から悪い事した覺もない廣い世の中に何、かうしてるものかね、遠うの昔に思ひ切つて、あの良人と別れてるさ、それが定ちやん、どういふ因果の腐れ縁か、さら／＼未練はないが、ふしぎに別れもせず離れもせず、かうなつてる以上、この小露は死んで仕舞うて、今この妾は死骸だよ」

「姐さん、つまり姐さんは、小野さんのため、殺されて仕舞つたやうな、理由にでもなるんですか」

「今更ら愚痴ッほいが、考へて見れば、まア、さうだらうねエ、しかし自分が承知で、幾度も念を押された覺悟の上で、殺されたんだからね定ちやん、怨恨の遣り場もないよ」

「かうなる姐さんは承知の上で、かうなつたにしても、あの小野さんが、それで済みますか」

ね、かうならない以前から妾それが残念で、心外で堪らないんですよ、どれほどの男冥加に生れた人か知りませんが、いかにも小野さんの圖に乗つた我まよな仕方が、あんまり酷過ぎますもの」

「妾の身を思つてくれて、さう考へりやアさうだがね、また強ち、あの良人ばかりが酷過ぎた仕方でもないよ、やはり妾がかうなる因果に出来てるのさ、これに懲りて定ちやん、藝妓は藝妓で金に出されるか自然の縁に付くか、なるやうに、なるのが正當の終焉だよ、必ず無理な意氣地を立てよ自分の我を通しちやア不可よ、妾だつて、たゞ世間普通の藝妓氣質で音も曲もなく渡れば、かうもなるまいが、なまじツか人に知られて世間に唄はれただけ猶更ら、かうなつた原因さ、定ちやんも随分、たゞの藝妓で濟みさうもないらしいから、この妾を手本にして間違はないやう行末めでたく安穩に過して、おくれよ、昔から名物に

なつた藝妓で末を遂げた女は、ないんだからね、あと考へて見れば、夢のやうな浮世を経

て来たよ、ねエ」

小定、しみく、悲哀に打たれて、ちツと其顔を打守りぬ、

「さう聞けば姐さん、もう妾は、いふ事がありませんよ、小野さんは今日どちらへ」

「實はね定ちやん、今、居ないのよ、日本には居ないよ」

「おや、全體、どこに」

「朝鮮さ、この一月から朝鮮へ渡つて、京城に居るんだよ」

「あら、まア、姐さんを一人、こよへ置ツ放しに仕て」

「なアに今いふ通り妾は、もう用に立つた後の死骸さ、死骸だから、こよに葬られてるのさ」

「嗚呼、いやだ事、いやな事を姐さん、聞きますねエ」

浮舟

生きた小露は過ぎし昔の事、もはや殺されて用に立った後の死骸を、今ここに葬られしといふ一言が、いかに其身の不運を諦めし血の涙か、いかに小定の胸を裂きし白刃となりしか、門前に送り出す小露、引止めねども此まゝ歸したくなし、門前に送り出さるゝ小定、止まらねど此まゝ歸りたくなし、

わづか二町餘を隔てし向島の土堤には、咲誇る櫻花爛漫の下に、隙間もなき衣香扇影の春ながら、こゝには埋れ木の花もなき生涯に我身を捨てよ、あはれ浮世は夢の一瞬しみくゝと濕り勝なり、

「定ちやん、身體を大事にして行末、めでたく出世お仕よ、うれしいが此の後、もう二度と再び訪ふて、おくれでないよ、また杉山さんには、それとなく餘所ながらよろしくね、お

神位を申して置いて、おくれよ」

小定、振返りながら、また立歸りぬ、

「ちやア姐さん、歸りますよ、思ひ切つて妾、歸りますよ」

「いつまで居て貰つても、同じ事だからね、どう尋ねられても、いふて宜いだけの外いふ事の出来ない理由があるんだからね、いくら妾を思つてくれても、折角の親切を無にするばかりだからね、それが猶更辛いよ、定ちやん、後で泣くとも早く歸つてほしいよ」

「だから姐さん、歸りますがね、もう姐さんの事に付ては、何もいひませんがね、小野さんは全體、いつごろ朝鮮から、お戻りなさるんでしやう、お戻りなすつても姐さんは、やはり此まゝこゝに居なさるんですの」

「また定ちやん、そんな事を、あの良人がいつ戻つても、この妾が、どうなつても宜いちや

「アないかね、捨てとお仕舞よ」

「捨てる事は、捨てましたがね、實は姐さん妾まだ心底から、さうまで氣強く捨きッて仕舞はれませんよ、そりやア無理ですよ、考へて見て下さい、さんざ永久の間お世話になつて兎も角、今ぢやア一人立の出来るやうになつた妾ですもの、犬だつて三日の恩は忘れないといふぢやアありませんか、その妾に、忘れきッて仕舞へ捨きッて仕舞へとは、嗚呼いつの間にか姐さんも小野さんに連れて、情のなアい、氣心の冷たアい、酷い女になりましたねエ」

小露、天を見上げて齒を咬占めぬ、

「なるほど、さう思はれるかも知れないねエ、桔梗屋小露の身の果は、つまらない男に欺されて、馬鹿な情死でもして仕舞つたものと、思へば、それで済むぢやないかね」

もはや再び物も得いはず、互に顔も見合はず、其まゝ無言に送り送られぬ、

花は枯れても再び春に還りて咲き、人は枯れて再び世に出でず、わづかの田圃路を隔て同じ眼前に花と人との榮枯盛衰、その中間に身を置く小定思はず涙の目元に振返れば、まだ入りもせて門前に立ちながら名残り惜氣に見送る小露の姿、あはれ何とやら影うすし、

此まよ思ひきッて別れても、今夜の目に残り胸に残る面影、まして現在まだ其まよ門内へは入らぬ姿を見返りし小定、我を忘れて急ぎ歩に立戻りぬ、

「姐さん、どうしても妾、此まよぢやア歸れませんよ、まだ何だか、言残した事がありますよ」

今更遁けも入りかねし小露、倒るとばかり門の柱に身を寄せかけて、さめくくと泣きぬ、

「定ちやん、また戻ッて来てくれたのかねエ」

「姐さん、妾ね、今、ふと氣の付いた事があるんですよ、あまり悲しくツて、口惜しくツて、ほんやり仕て居ましたがね、急に考へた事が」

「あとまで言ひきつた妾に、もう何も、言残した事は、ない筈だがねエ」

「いよへ、ありますよ、ありますとも、姐さんの言葉に、この身體は小野さんのため、もう用に立ッて仕舞ッた後で、その死骸だと、お言ひなすつたらう、それに付いてどうすよ姐さん、どういふ因縁か理由か知りませんが、今までの小野さんに對しての姐さんは、杉山さんも、妾も、残念ながら、たゞ見物して居ましたが、用に立ッた後の死骸だけは是非、この小定が、貰つて歸りたいんですよ、いくら氣の強い我まよな小野さんだツて、さんざ自分か勝手の用に立ッて仕舞ッた後の死骸まで、焼いて食はうとも煮て食はうとも、仰しや

いますまい、その姐さんの死骸を、妹分の小定が、永久の間いろくお世話になつた小定が、貰つたツて引取つたツて彼是、仰しやる筈はないでしやう、また姐さんも姐さんですよ、乗りたくもありませんが、乗れば何時でも乗れる玉の輿を數個も振捨てよ、あれほど唄はれた名物の生きた小露を勿體ない、小野さんのため、殺されるまで苦勞をすりやア、もう宜いちやアありませんか、その死骸を妾に引取らして下さい、こよに此まよ葬られたよりも、妾が大事にかけて葬るところへ葬りますよ姐さん、外に同胞のない小定ですよ」

小露、もはや堪らず物も得はず、其まよ門内に遁入れば、恨めしけの目元に涙を含みし小定、

「こよまで、こよまで思ツてる妾を姐さんそれちやア、あんまりですよ、桔梗屋を嗣だ小定